

文楽座

人形浄瑠璃

二月興行



文楽座

四つ目

早春二月の

文樂座人形淨瑠璃

紅梅の香り床しき折柄みなさまには益々御健康にあらせられ、お欣び申上ます。儻て郷土藝術最高峰の文樂人形淨瑠璃は最近斯道の研究好愛家より更に大衆的に視聽の蒐まるころとなり、軌近の人氣は實に素晴らしるもので御座ゐます。爰に早春二月の本格興行と臻しまして、珍らしく紋下津太夫の「合邦」久方振で上演を見たる土佐太夫の「湊町」激刺たる意氣の古韻太夫の「寺子屋」に精銳若手連の奮闘著るしき各場の盛觀、この極彩色版の全幅を掲げて華々しき熱演。以てみなさまの御厚情にお應へいたしますれば、より厚き御聲援の程お希ひ申上ます

昭和七年二月

四ツ橋

文樂座

昭和七年一月三十一日初日

初日・二日目 二時開幕
三日目より 三時開幕

御觀覽料

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等席 御一名 金一圓五十錢
- 三等席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席 は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 専用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌カトツ廣御告掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀一通丁目

長三〇八番
 四九四番
 四九四番
 四九四番 } (44) 土佐堀

二 月 本 格 興 行
文 樂 座 人 形 淨 瑠 璃

豫 定 時 間 表

前

菅原傳授手習鑑

車先の段より
寺子屋まで

車先の段 (三時より三時二十五分まで)

茶筌酒の段 (三時二十五分より四時まで)

喧嘩の段 (四時より四時十五分まで)

訴訟の段 (四時十五分より四時廿五分まで)

櫻丸切腹の段 (四時三十五分より五時十五分まで)

御休憩時間

十五分間

寺入りの段

(五時三十分より五時五十分まで)

松王首實檢の段

(五時五十分より七時〇五分まで)

御休憩時間

二十分間

中

攝州合邦辻

合邦内の段

(七時二十五分より九時〇五分まで)

御休憩時間

十五分間

切

おなつ清十郎 壽連理の松

湊町の段

(九時二十分より十時二十分まで)

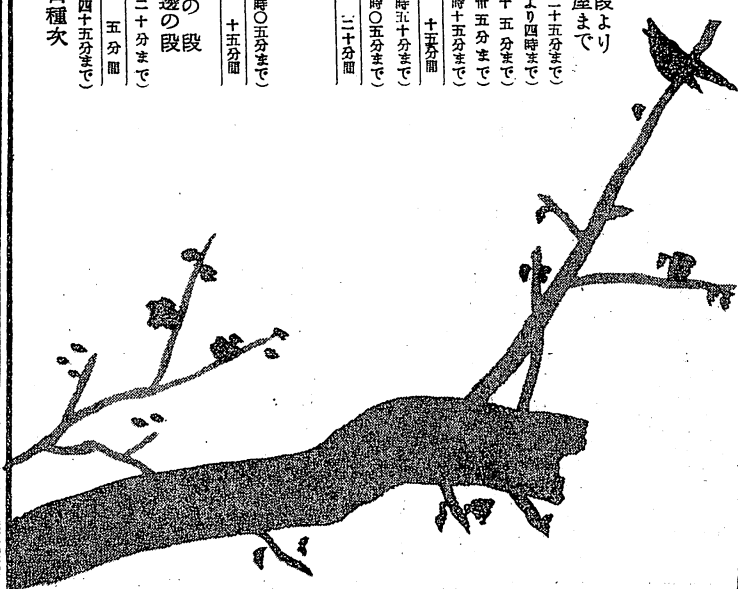
御休憩時間

五分間

住吉濱邊の段

(十時廿五分より十時四十五分まで)

舞臺意匠 松田種次





人形淨瑠璃考

◆人形芝居發達のこと

◆文樂座なり立ちのこと

◆人形頭説明のこと

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたさ御座います。其當時に、し三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたのでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、さ云ふ想像は出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いて居たらしく御座いますが、淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたさ思はれます。而して、其内には例の三味線の渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋さ云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線の上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形さ此三者が綜合される事に成りまし

たのむ、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですが、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか茸屋
町さか、橋む立つて此人形芝居が繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ
り無く其人形とて首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈操が始めて其手足の工夫も
したものですさか。由來此操號なる
ものば人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

るま人形が出来たり、次郎三郎が
おやま人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるさ大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をばじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めば此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の陰に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が結を着け手摺を離れ無

量の手裏を遣ふに其全身少しも亂る
事がないといひ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかを盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてからが先づ眼が動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるさ豊竹座「武烈天皇

「織」の佐手彦の肩を動かしてはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が置出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の「國性爺後日合戦」に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の暗業を示して以來、さいふものは實に此人形について工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭り』の人形に始めて帷子衣裳を着せるとか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒纏子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時代さいふものは操盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞實は凄まじい有様であつた云ひます。江戸まで矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雪が淡路の人形舞し、此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演つてゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる。漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長も今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以来發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四ッ橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます。次第で御座います。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足、四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんひし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので、其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴さありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます。兎もあれ昔相巫や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振

袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太も呼んでゐるが聞きますが持役として『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめるが『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染、『壺坂』のお里、『妹背山』のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城さあるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



車先の段

前
菅原傳授手習鑑

車先の段

茶筌酒の段

喧嘩の段

訴訟の段

櫻丸切腹の段

寺入りの段

松王首實檢の段

野鶴澤勝 平叶

人形

松王丸 竹本文字太夫
梅王丸 竹本鏡太夫
櫻丸 豊竹島太夫
杉丸 竹本辰太夫
時平 竹本長尾太夫
野鶴澤勝 平叶

舍人梅王丸 吉田玉松
舍人櫻丸 桐竹紋十郎
先拂虎王 吉田玉徳
藤原時平 吉田玉幸
舍人松王丸 吉田玉三
仕丁大田榮三

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天満宮へ祈願を籠め必死の覚悟で各自分擔書下したのがこの淨瑠璃で果然

好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因縁深い名作である、殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは「骨肉の別れ」といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた逸話が胎されてゐる。

(床本) 車先の段

鳥の子の翼にはなれ魚陸に上るこは浪人の身の喩へ種、菅相巫の舍人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賭ひ、御臺のお行衛尋れんご笠ふか／＼と深線土手の並木に差しかれば、向ふからも深編笠、我に違はぬ其出立、互ひにそれぞ近く寄梅王丸か、コレハ／＼櫻丸、ヤレそ

ちに逢たかつた、マア咄す事聞く事
有りよ、兄弟こかげに笠傾け、狐先
問其方は日外加茂堤より宮姫君の御
後したひ尋れ行きしよ、内實八重の
ものがたり、何とお方に尋れ逢た
か、成程道にて追付奉り菅相丞御
流罪と聞きより對面なさしめ奉らんこ
安居の岸まで御供せしに、御對面か
なはず、輝國殿の計ひにて、御歸落
願ひの妨げとお二方の御縁も切られ
姫君は土師の里伯母君の方へ御出、
齋世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉
り事治りしさいひなむら、納らぬは
我身の上、冥加に叶ひお車を引く其
有難い事打わすれ、賤しい身にて戀
の取持、終には御身の怨となり、宮
御謀叛と讒言の種拵へ御恩請たる菅
相丞様流罪にならせ賜ひしも、皆此

櫻丸がなす業と思へば胸もはり裂如
くけふや切腹、あすや命を捨ふか
思ひ詰はつめたれど、佐太におはす
一人の親人、今年七十の賀を祝ひ
兄弟三人嫁三人並べて見るに當春よ
り悦び勇おはするに、我一人缺るな
らば不忠の上にも不孝の罪、せめて御
祝儀祝ふた上と詮なき命けふまでも
ながらへる面目なき推量有れ梅王と
拳をにぎり齒をくひしめ、先非を悔
たる其有様、梅王も理りま暫し詞も
なかりしが、チ、道理く我さても
主君流罪に逢賜ふ上は都にさいまる
筈なけれど、御館没落以後御聖様の
お行衛しれず先づ此方を尋れふか筑
紫の配所へ行ふか、取つゝ置いつ
心は、やれど其方がいふごとく、年
寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月

これも心にかゝる故思はず延引互に
思ひは須彌大海、せひもなき世の有
様よ、兄弟顔を見合はせて涙僅す折
からに、鐵棒引て先拂ひ先退て片寄
れと雜式がいかつ聲、櫻王立寄ごな
たぞ尋れば本院の左大臣時平公吉
田への御參籠出しやばつて鐵棒くら
ふなさ、いひ捨て急ぎ行く、何ぞ聞
たか櫻丸齋世の宮菅相丞を憂目に逢
せし時平の大臣存分いばふじや有る
まいか、成程く、よい所で出つく
はしたと兄弟道の左右に別れ尻引つ
からげ身むまへし今や来たるぞ。
程なく轟く車の音商人旅人も道をよ
きる時平の大臣が路次に行粧さなか
ら君の御幸の如く隨身青侍前後に列
し大路せばしと輾らせたり。兩人こ
かげを飛び出で車やらぬくと立ふ

茶筌酒の段

竹本 綴太夫
豊澤 新左衛門
竹本 大隅太夫
鶴澤 道八

喧嘩の段

竹本 相生太夫
鶴澤 友衛門
鶴澤 清二郎
豊竹 つげめ太夫
豊澤 仙糸

訴訟の段

竹本 相生太夫
鶴澤 網右衛門
豊澤 猿太郎
豊竹 つげめ太夫
豊澤 仙糸

こせき上エ、おのれにも云分有れ共
親人の七十の祝賀儀濟までナフ梅王
チ、其上では松の枝々切折つてかた
きの根をたち葉を枯さんチ、それは
此松王も親父の賀を祝ふた後で梅も
櫻も落花微ぢん足もこの明い中早く
去れ、ヤア推参な歸るをおのれに
ならはふかさつめ寄、兄弟三人互
ひに残す意趣遺恨にらんで左右へ、
別れ行く。

(床本) 茶筌酒の段

別れ行く、春さきは在々の鋤鎌迄も
樂くさ、あそびがちなる一農、一
番村では年古き人にしられし四郎九
郎、律義一遍さりえにて菅相亟の御
領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の
掃除承はり松梅櫻御愛樹に土かい水

の養も根が農の報仕事我身の老
木厭なく幹をこやし百姓業畑の世
話より氣樂なり、埤端の十作も鋤打
かたげ門口から四郎九郎殿内にかこ
はいるを見付けコリヤ十作畑へカイ
ヤ今仕廻て戻つたりや嬢がいふには
何やらめでたい祝ひじやてて、大き
な重箱に眼へはいる様な餅七つ、朝
茶の鹽にも喰足れごもらばぬよりも
忝ない禮もいひたい祝ひさはマア
何でござる、サイノ菅相亟様のふつ
て運た御難儀を下に住おらうが身、
祝ひごころじやなければ、せにやな
らぬさかいで仕るは仕るが世間へも
遠慮が有て、彼岸園子程な餅七ツ宛
配つたは、此四郎九郎、丁度七十、
この春年頭のお禮に登つた時おらが
年をお尋ね、七十と申したりや、古

櫻丸切腹の段

切

竹本 鍛太夫
豊澤 新左衛門
竹本 大隅太夫
鶴澤 道八

人形

百姓 白太夫 吉田 小兵吉
堤畑 十作 吉田 玉市
女房 千代 吉田 文五郎
女房 八重 吉田 扇太郎
女房 はる 桐竹 紋太郎
舍人 松王丸 吉田 榮三
舍人 櫻丸 桐竹 紋十郎
舍人 梅王丸 吉田 玉松

來稀な長生、其上めづらしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、梓共は御所の舍人、めでたいく、産れ月、産れ日産れ出た時限違へす七十の賀を祝へ、其日から名も改てノウ聞がしやれ、伊勢の御師か何ぞの様に白太夫とお付けなされた、則ちけふが誕生日白黒まんだらかい掃溜へほつてのけ、けふから白太夫と言ふ程にそふ心得て下され、夫はめでたい序ながら聞ましよ、三つ子産ま扶持下さる、其謂も聞かしやつたが、サイノ死た女房が産だ時は邊隣の外聞、ひよんな事じやと思ふた

童こやら是も御所で仕ばる、法式は忝ない物旦那殿は流罪なれど、おらは所も追立てられず下された田地は其儘そちの畑も若い程に産すならおらにあやかりやと咄の中途、たどりくるは櫻丸が女房八重、けふは舅の祝ひ日さて。風呂敷包片手に提げ、嬉しや爰じやと笠取れば、ホィ櫻丸が女房八重が、早かつたく外の嫁子も揃ふてくるか、マア上つて拘もさきや、アイくまだ皆様はお出ないか、遅かると氣おせい、淀堤から三十石の飛乗船の足の早いので草臥もせず早來たが仕合せでござんする、コレ四郎九郎殿、お客そふなもふいにまよエ、四郎九郎さは物覺へがない十作、白太夫じや忘れやつたかいの、イヤ忘れはせぬわいの

餅の祝とは格別、名酒呑ればいつ迄も四郎九郎ハレヤレ盛た酒を飲ぬまは但しはまだ飲足ぬかへ、ぬけくそ嘘いふわちよおらに酒いつ盛たチいさつきに盛た樽や徳利は目に立つゆへ餅の上へ茶釜の先で酒搥打てやつたので二度の祝ひ濟だじやないかエいそれで聞へた、嬢が酒くさい餅じやと言た、外へは遠慮でそふ仕やろとおらは日來懇だけ、晩にきて寢酒一杯お客是にさ出て行、嫁ん女アレ聞きやつたか、今の世の人はいきめごまかで、おらが始末の手目見付けて、晩にきて寢酒たべふ、ハ、ハ、ハ、ア、いせち賢い懇ぶり、イヤ又お前も餘りな聞きも及ばぬ茶釜酒、ホ、ハ、ハ、ハ、いご嫁ご舅の睦じさ、梅王松王兄弟の女房がくる道草も、女

子の手業笠に摘みこむ蒲公英、嫁菜狗狛の垣根を目印にサア爰ぢやおはる様、マア先きへイヤお千代さんがらさ、相嫁同士が門での辭儀合、白太夫おかしがり、一時に産だ三つ子の嫁共先の後の所かい、八重がさふから待て居やる、ごちこちなしにはいれく、ほんに入重様はやかつたござんする道なれば、はるが所へ誘ふても下さんしよかご、待た程お遅なはつて心せきな道すおち千代様に行き合ふて連立て来る道てんこう、けふの祝ひのしたしにさ嫁菜、蒲公英二人の仕業夫はよふ氣がついた、はる様勝ふ約束も、日足のたけに氣せきて寄る事も忘れたに、お千代様さばよいお出合、サイナおはる様に逢たはわしが仕合せ、賑かな道連

それはそれぢやが親父様御料理の拵へ出来て有かへ、イヤ出来てない、わごちよ逢にさす合點、こてくごむつかしい事は入らぬ、けさ搦た餅で雑煮仕や、上置きはした昆布、鹽の入らぬやうに茹て置た、大根も芋もそこにある勝手は知るまい、ヤアえいくご立上れば、イヤ申、けふの祝ひはお前が目當料理方の出来るまで何にも構はず一寢入なされませ、勝手しられご三人寄つて何もかも取り出す、そふじやて、立た次手柵なものおろしてやる、コレく是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや、折敷も拾枚、おらが息災なも此椀折敷堅地なごてかかんまへて手荒ふ當るな嫁女達、此マア悴共はなげ遅い來る一軒さ体を横にさし枕堅地

作りの親仁なり、コレ皆様何ほう、あの様におつしやつても雑煮ばかりでは置かれぬ、飯も焚ぎなるまいし何はせいで鯉鱈、道草の嫁菜お汁によかる、八重様ちよ様頼ます、此はるは飯仕かけふと手入にて粗板摺粉鉢、米かし桶にはかり込み、水入らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻みちよきくくこ手品よく、味噌摺る音もにぎはし、白太夫目を覺しコリヤ悴共はまだこぬか、正月から知れて有るおらが祝ひ日、油断せう筈はないが、ア、此中誰やらチイそれく今いんだ十作も咄しには時平殿の車先きで三人の子供が大喧嘩聞てかこしらしてくれた喧嘩の様子嬢達はしつて居よ、車先きでの事とあれば、時平殿に奉公する松王が女

房、爰へきて様子を言やと名指にあふたは千代が迷惑、お祝ひ事の濟まではお前の耳へ入れぬがよいと三人ながら其心、いらぬ事しやべられて隠されれば申します、梅王様櫻丸様二人の相手にこちの人、日頃の短氣言上つて兄弟喧嘩したのが氣遣ひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場はそれで濟だれ共、もちやくちやいふて居られます、はる様八重様お前方もそふである、氣の毒な男の不機嫌、成程く、ちよ様のいはんす通り、けふの祝ひをい、立て兄弟御の仲なをし親御のお詞か、らいでは、男思ひの壁訴訟、エ、わこりよ達に問たらば知れうと思ふた喧嘩の筋知つて居ても言はぬが、同じ胤腹、一時に生れた悴でも心は別々、

よふ似た顔を二タ子といへど、それもそれに極まらぬ、女夫子も有る又顔の似ぬ子も有る、マア大柳顔の似れば心もよく似て、兄弟の中もよいものじやがおらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるこい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどふやら根性の悪そふな松王の面がまへ、ヤ千代も傍で廬相いふた氣にかけてたもんな、マア、怪我がなふて嬉しうおりやる、怪我がの次手に孫めは健な、連れて来て顔見せいで、ヤアさかふいふ中もふ七ツじやおれが生れたは申の刻限料理も大かた出来たである、嬢達膳を出さぬかい、アイくく刻限の過る迄連合衆はなせ見へぬ、千代様八重様、道までいて見てこまいか、爰で待つと

より三人ながらござんせいかふ、マア嬭達何言ふそい、子供共は来て居るはい。アノ来てちやとば、ごこに、エーごんな嫁共、そこに居るを得しらぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は残らず揃ふて有れ、勿体ない昔巫巫様くゝめるやうにいはいました、生れ日の刻限が違や悪い、祝儀にはかげの膳もすへるならひ、サア〜早フと白太夫が、いふに猶豫もなりがたく俄に盛るやら箸打つやら、椀の向ふの小皿にごまめ、まづ一番に親父様、是でおすばりなされませと、給仕は元よりならはれど見馴聞馴、舉動ひ、八重が配膳、御所めけり、イヤおれもあそこへいこイヤ土間で冷が上ります。やつぱり爰でと押備

へ、是から面々夫の給仕膳を捧げて庭におり、此梅の木が梅王殿枝ぶりすんご日頃の氣質、八重が連添ふ男ぶり、木ぶりも吉野の櫻丸、是は千代まで添ひ送る女夫が中の若緑り色も艶々艶ひよい、松王殿で子達も揃ふ、サア親父様目出たふお箸なされませ、ホーなされふ共〜親がいに座が高い、子供共へドレ挨拶、ハテもふそれには及びませぬ、お加減のさめぬ内イヤ〜お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つた辭遣作法ご庭におりるもまめやかに樹の前に畏まりイヤ是子供衆、何にもござらず共よふまいつて下されい、親の折角おりての辭宜、辭宜返しがしたふて

ついで悦び笑ひ、我膳に押直り、替を取るよりムウ〜扱搥梅じや味し〜、三人の嫁女達給仕も片いませぬ様に、三ばいは喰合點で、おじやらしまするじやなんよハハハハ〜こりや新しい三方土器誰が持て來ましたぞ、イヤそれは八重様の、ハテ氣がつて忝けない、春も何ぞくれるかい、ほんに忘れておりましたと、扇三本袖土産中の繪は梅松櫻お子達のかづを祝ふて三本ながら末廣がり目出度ふ祝ふて上まする、こりやめでたい忝いな、中の繪も咄しで知れた、明けて見るに及ばぬ此儘〜戴きまするご機嫌に千代が袂からは切の有合いでわたしが縫た手筒頭巾、つむりにあはずは縫直さふ、お召しなされて下さんせ、チ〜これも〜不

足もない心付きなくやり物、サア
 盃も濟だは、おれが膳から上つた
 も、子供等が膳は盛たまゝ、冷た
 有らふ盛直してコレ婢達二人前づ
 喰てたもや、イエ／＼私達はまそつ
 と待て、主達が見へてから打並んで
 祝ひましょ、そんならそれよ、おれ
 は村の氏神様へ参つて來ませふ、そ
 んならお参りなされませ、チ／＼
 往きませよ、拵へて置た十二銅そこ
 に有る取てたも、三本の此扇、未廣
 ふに子供の生先氏神へ頼んだり見せ
 たりせう、ヤア八重はまだ参るまい
 次手ながら連立ふ、サア／＼こちへ
 と機嫌よふ表を。

(床本) 喧嘩の段

さして出て行く、コレ千代様、年寄
 しやつてももの覺へがよい事こなた
 さんや此春は氏神様しつて居る、八
 重様は今が始め、いはしやんすりや
 其通り、物覺へのよい親御に違ひ、
 物忘れする子供達、松王殿なぞ遅い
 ぞ、こちらの夫もなぞ見へぬ、但しは
 こぬ氣が、けふ見へいでよいものか
 いな、それそこへ松王殿は是女房を
 立つ所に立たして刻限過ぎたを知ら
 ずかい、ヤアベリ／＼こかしましい
 時平様の御用有つて夫仕廻ればいごか
 れぬ、先へ参つて其譯いへと言付た
 を忘れたか、梅王も櫻王もまだこぬ
 そふな、親仁殿も内にござらぬ、サ
 ア其親父様は八重様を同道で、もち

つとさきに氏神参り兄弟衆はまだ見
 へぬソレ見いな、遅いといふおれは
 主持ち、梅王も櫻丸も主な！の扶持
 放され、用もないわゆる達が遅いのが
 ほんの遅いの、お春殿そじやないか
 と詞の端にも残る意趣、梅王も日脚
 はたけるせいで來かゝりつゝかう、
 松王には顔ふり背け、お千代殿けふ
 は太儀コリヤ女共親人と櫻丸、八重
 も爰にはなぞ居やらぬ、イヤ今も松
 王様のお尋ね、櫻丸様はまだ見へぬ
 お二人は宮参り、ム、櫻丸はごふし
 てこぬな、ア待乗る者はこいで、胸
 の悪い見さむない煩がまへと、梅王
 に當こすられ松王丸逸徹短慮あたぶ
 の悪いれすり言、いひ分有らば直に
 いやれさ、何のわれに遠慮せう、わ
 が煩がまへを見る度々グイ／＼と虫

唾^{つば}が出る、ハ、ハ、ハレ申^{まを}したり腹^{はら}の皮^{かわ}此^こ松^{しょう}王^{わう}は生^うれ付^つて涙^{なみだ}もろい、櫻^{うら}丸^{まる}やそちが様^{さま}に、扶^{たす}持^も放^{はな}されの瘦^{やせ}頓^{どん}い、ひだるからふと思^{おも}ふてやる、兄弟^{にい}のよしみ丈^{だけ}お、扶^{たす}持^も放^{はな}されと笑^{わら}ふやつが喰^くふ扶^{たす}持^もかゝるくなく扶^{たす}持^もか鐵^{てつ}丸^{まる}を食^くすといへ共^{とも}心^{こころ}穢^{けが}れたる人^{ひと}の物^{もの}を請^{まを}けすといへ八^{はち}幡^{ばん}大^{だい}菩^ぼ薩^{ざつ}の御^{おん}託^{たく}宣^{せん}、心^{こころ}汚^{けが}れた時^{とき}平^{へい}が扶^{たす}持^も有^あむたふ思^{おも}はな、人^{ひと}でなしの猫^{ねこ}畜^{ちく}生^{せい}ヤア畜^{ちく}生^{せい}とは舌^{した}長^{なが}な梅^{うめ}王^{わう}、今^{いま}一言^{ひとこと}いふて見^みよ、お、望^{のぞ}みなら安^{やす}い事^{こと}畜^{ちく}生^{せい}くゞふ畜^{ちく}生^{せい}、もう教^{おし}されぬと松^{しょう}王^{わう}丸^{まる}刀^{とう}の柄^{えい}に手^てをおくれば松^{しょう}王^{わう}も反^{そり}打^{うち}かへし詰^つ寄^よつめよる二人^{ふたり}の女^{によ}房^{ぼう}、是^{これ}はマアおさましい氣^きが違^{ちが}ふたか梅^{うめ}王^{わう}殿^{どの}千^ち代^よが夫^{おと}を抱^{かか}止^{とど}むれば七十^{ななじゅう}の賀^がを祝^{いわ}ひに來^きて親^{おや}父^{ふち}様^{さま}に逢^あはせす反^{そり}打^{うち}てごふさしやる、

祝^{いわ}ひ日に拔^ひけてよいかちの人^{ひと}梅^{うめ}王^{わう}殿^{どの}さ刀^{かたな}の柄^{えい}にしがみ付^つく女^{によ}房^{ぼう}春^{はる}を取^とつ突き退^ひけ、七十^{ななじゅう}の賀^がでも祝^{いわ}ひ日^びでも堪^{かた}へ袋^{ぶくろ}のやぶれかぶれ、留^{とど}立^だして怪^{あや}我がするな、コリヤ松^{しょう}王^{わう}後^{あと}れたな、女^{によ}房^{ぼう}が留^{とど}るを幸^{さい}に煩^{わづ}げたに似^にぬ腕^{うで}なしめチ、留^{とど}らるゝを幸^{さい}ひさば、我心^{わがこころ}に引^ひきくらべて松^{しょう}王^{わう}には慮^り外^がの雑^{ざつ}言^{げん}身^みか女^{によ}房^{ぼう}が留^{とど}たよりそちが女^{によ}房^{ぼう}が親^{おや}にもまだこの一言^{ひとこと}、肝^{きん}先^{さき}へきつと當^{あた}りこらへくこらへたがもふたまたらぬ、眞^{まこと}劍^{けん}の勝^{しょう}負^ふは親^{おや}人^{ひと}に逢^あつての後^{のち}それまでの腹^{はら}ひせに砂^{すな}かぶらせれば堪^{かた}忍^{しの}みならぬ、千^ち代^よに是^{これ}を預^{たく}けると兩^{りょう}腰^{こし}拔^ひけてほうり出し裾^{すそ}引^ひからげて身^み拵^じへお、畜^{ちく}生^{せい}めがこりやよい了^{りょう}簡^{かん}、櫻^{うら}丸^{まる}が來^きるまで松^{しょう}王^{わう}が命^{いのち}松^{しょう}王^{わう}に預^{たく}けると同じく兩^{りょう}腰^{こし}ほうりすて、又^{また}物^{もの}を渡^{わた}

せば血^ちはあやさぬ、女^{によ}房^{ぼう}共^{とも}邪^じ魔^まするなご、すつと寄^よて縁^{えん}より下^{した}へ踏^ふ落^おせばさそくの松^{しょう}王^{わう}落^おちさまに諸^{もろ}足^{あし}かけば梅^{うめ}王^{わう}丸^{まる}眞^{まこと}逆^{さか}様に落^お重^{かさ}り、摺^{すり}み合^あい擲^なき合^あい、組^{くみ}んでは放^{はな}れ離^{はな}れては又^{また}組^{くみ}合^あい捻^ひじつけ引^ひふせ蹴^けつ踏^ふづ、双方^{ふたう}力^{ちから}も同^{おな}年^{ねん}、血^ち氣^き盛^{さか}りの根^{こん}くちべ千^ち代^よと春^{はる}とは二人^{ふたり}の兩^{りょう}腰^{こし}、取^とれもせうかど氣^き遣^やひ半^{はん}分^{ぶん}傍^{はた}へも寄^よれず、ハアくぐぐ心^{こころ}をあせり、氣^きをもみ上げごちらが膝^{ひざ}も負^まもせず擲^なき合^あたが二人^{ふたり}の存^{ぞん}分^{ぶん}、梅^{うめ}王^{わう}殿^{どの}もふよいわいな松^{しょう}王^{わう}殿^{どの}もふおかしやんせ、止^{とど}めてさいふをも聞^きかず、勝^{しょう}負^ふ、つかではむざ働^{はたら}き投^なげてくれんぞ松^{しょう}王^{わう}丸^{まる}かさにかいつて押^おす力^{ちから}、ひるまぬ梅^{うめ}王^{わう}つかへる、肩^{かた}先^{さき}ひれつてかつくりさせ横^{よこ}に抱^かへる松^{しょう}の木^き腕^{うで}、劣^{せう}らぬ肘^{ひじ}骨^{こつ}

梅の木腕、からみもちつて、押合ふ力、双方一度にこけかゝり、もたる拍子櫻の立木、土際四五寸残る木の上はほつきりぐはつきりと折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力俱にあきれて手を打拂ひうるつく中へ早下向、アレ親父様のお歸りしや、白太夫様のさいふ聲に二人は肩入れ裾おろし腰刀指す間も、

(床本) 訴訟の段

有らず戻られし年は寄てもこはいは親、上へも上らず大蹠躑けふの御祝儀お目出度いと、祝儀は述ても赤面し塵をひれらぬばかりなり、親はほやく機嫌顔、娘達か先へ来て七十の賀を祝ふてくれたで、けふの祝ひはさらりさしもた。しれて有る制限

遅いは何ぞ障りが有つてこぬに極めた、梅王松王よふこそく来てくれた。コレ二嫁女煮くちたで有ふが雑煮祝はしてたもつたかぞ折た櫻は見ながらも誰が仕わざぞそ咎めもせず呵るまゝを呵らぬ親、一物ありま知られたり、梅王丸懐中より用意の一通取出し祝儀濟で候へば私の所存の願ひ是に書付け候と親の前に差出せば松王も又一通身の上の願ひ是に有りと同じ所へ直せしはいひ合はせたる如くなり、白太夫打笑ひ心安い親子兄弟夫婦斯並んだ中願ひ有らば口でいはいでぎつとした此書付けさらばおらもぎつとして代官所の格で捌こ願ひ書手に取り上げ、つぶく讀も口の中、願ひは何やら聞へれど春と千代さは夫の心知つて居る

筈後先きをしたられば案じる八重一人三人の兄弟鬪争親父様お頼み申し、けふ中直しと言ひ合はした千代様春様こりや何ぞい、何をいふてもこちの人櫻丸殿ござらぬゆへ、心當が皆違ふた道で眩暈がおこつたか見えぬ男を案じるやら二人の願ひも氣にかゝり小首傾け案じ居る、親父は二通讀仕まい、コリヤ梅王そちが願ひに旅へ立障くれせば、ム、推量するに外でも有るまい普相巫のござる島か成程く、結構な御殿に引きかへ垣生の小屋の御住居、御用聞く人なければ梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇と申ける、ム、恩を知らぬ人面獸心さいふてな、顔は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辯へぬ畜生氣

は離れた心、コリヤやい御臺様や、若君様おかりも遊ばされず、ござる所も知れた上旅立の願ひじやな、イヤ御臺様は其以來お目にもかいらす御座所も存じませぬ、併し女儀の御事なれば若君様さは又格別、菅秀才の御事は慥にこいばんせししが松王を尻目につけ、慥に所は存ぜれ共息災に御座有る噂さ、ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才様息災なを聞たばかりお目にもかゝらず有家もしらず、それで俯忠義が濟が、女儀の身もぬかしおる御臺様は主じやないが、コリヤやい尤御不自由な配所の御住居お傍へ参つて御用を聞く膝行役の奉公は此白太夫がよい役ぢやはて、血氣盛り奉公盛り、菅相亟の所縁ぞ有れば根掘り葉掘り絶さんて鵜の目

鷹の目、油断ならぬ譏者の行爲すはと言ふ時、身を惜まず御用に立所存はなふて、膝行役願ふは命が惜いか敵がこはいか、旅立ちの願ひ叶はぬく取上げぬと願書願へ打付けてはつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり、ヤイ松王そちが願ひを見れば勘當を請たいさなハアハ、神武天皇様以來珍らしい願ひじやなエ、不孝者といはゞ醫のないやつ、餘り珍しい願ひなれば聞届けてくれるぞと親の了簡、ハ、ハア忝しと悦ぶ松王勇み立ち親子兄弟の縁を切る所存も問はず赦されしは此松王が主人へ忠義推量有つての事なるべし、ハ、ハ、ハ、いかさま口は調法なものぢやな、主人への道立て臍がくくれるわい、道

も道に寄つてはな横に取つて行く道を蟹忠義と言はいやい、甲に似せて穴を掘ると、勘當うければ兄弟の縁も離れ時平殿へ敵對ば切つても捨ん所存よな、尤善悪差別なく主へ義は立つにもせい親の心に背くをな、天道に背くこいふわい、望み叶へてさらする上は、人外め早歸れ、隙取ば親子の別れ竹箒くらはさふも筋骨立て怒り聲、松王は思ひのまゝ、女房こいと引立行く、千代は遠に親兄弟名残も惜き相嫁の顔を見るめもあかれぬ涙、袂絞つて出て行く、ハ、ハ、レ嬢しや面倒なやつ片付たヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衛、尋にかぬか、うせぬかこそも手づよふきめ付けられそなら嶋へはサア行所へはおれが行くわい、出て行く

をこぼるおぼる、八重様あとで能
いやうにお託言をさ言捨て夫婦は門
へ白太夫は唾を吞込んで奥へ行く。

(床本) 櫻丸切腹の段

兄弟夫婦に引別れ取残されし八重が
身の仕廻もつかぬ物思ひ門へ立そに
待つ夫思ひかけなき納戸口、刀片手
に完爾と笑ひ女房共嘸待つらんこ、
聲に恠り走り寄り、ヤアいつの間に
やら来た共言はず案じる女房を思は
ぬ仕方、兄弟衆の事に付て親父様
お腹立、其場へは出もせいでマアな
んでこな様は納戸の内に、エ、これ
ナア譚を聞かしてくく聞たがるこ
そ道理なれ、暫く有て白太夫拔出し
鏝の小脇差、三方に乗せしほく
と出るも老の足弱車、舍人櫻が前に

置き用意よくばさくくさいふに女
房又恠りヤアこりや何じや親父様櫻
丸殿ごふぞいなア、何て死ぬのぢや
腹切るのじや切らればならぬ譚なら
ば未練な根性さぎやしませぬ、こな
さんお言はれずば親父様の只一言案
じる胸を休めてたべお慈悲くく手
合せ泣より外の事ぞなきヤア親人に
何御苦勞、是まで馴染夫婦の中、所
存残さず言ひ聞かさん某が主人と
申すも恐れ多き齋世の君様、百姓の
件なれ共昔相巫様の御不便を加へら
れ親人へは御扶持方、御愛樹の松梅
櫻、兄弟が名に象り松王、梅王、櫻
丸、憚り有や冥加なや烏帽子子にな
し下され御恩は上なき築地の勤め、
三人の其中に櫻丸が身の幸、人間
の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々

の下たる牛飼舎人、勿体なくも身近
く召され、昔相巫の姫君さわりなき
中の御文使ひ、仕課せたが仇さなつ
て讒者の舌に御身の浮名終には謀叛
と言ひ立られ、菅原の御家没落是非
もなき次第なれば宮姫君の御安堵を
見届け養心を現はず我生害けさ早々
爰まで来て右の段々生て居られぬ最
期の願ひ、きく届けて切腹刀、親の
手づから下されたはい、女房共我等
にかはつてお禮も申し死後の孝行頼
むぞご義を立守る夫の詞女房つこ
聲を上げ仇なる懸路のお媒介〇〇様
の御悪名相巫様の流され賜ふ其言譚
に切る腹なら此八重も生ては居られ
ぬ私は残つて孝行せいご胴怒にもよ
ふいはれた、それよりはまたむごい
腹切禮を申せさば、それが何の禮ご

ころ無理な事いふ手間でいつしよに
死しきまコレ申ましま女房にようぼうの願ねがひたてたべ、
親父おやぢ様さまの思案しあんはないか、コレ俯うついて
ばかりばかり御座ござらず共ともよい智恵ちゑ出でし
て下くださりませ、夫おつとの命いのち生な死しは親父おやぢ様
のお詞ことば次第しだい、お前まへは悲あはしうござりま
せぬか、親おやぢの手てづから此この三方腹切刀はうはらきりなた
は何事なにごとぞと恨うらみつ頼たのみな身を投なげ伏ふもた
へこがるゝ有あり様さまはものぐるはしき風
情げいなり、白太夫しらたうふう顔かほふり上あげ子こに死し
いふ腹切刀はらきりなた、むごい親おやぢと思おもひひ譯
ではなけれどな、此曉このあけは我身わがみの祝いは
ひ、いつもより早く起門おきかどの戸明あれば
櫻丸おうまるヤレ早はやふ來きてくれた陸かちなれば夜
通なし、但たしは船ふねかサアまあちへこ
呼よ入れて様さま子こを聞きければ右みぎの次第しだい、白
太夫しらたうふうづれが伴ばんには驚おどき入いつ健氣者けんきものぞ
いめても聞き入いれずけふの祝儀しゆぎ仕まふ

まで、女房にようぼうが來きても逢あはしはせぬぞ、
おれおれが出でひこ言いふまで納戸ななどの内に
隠かくれて居ゐいと一寸延のびした命いのちをかげひ
助すけてよいか悪わるいかはおらがが簡かんに
及およばず神明しんめいの加護かごに任まかさんご最前さいぜん祝しゆ
儀ぎにくれた扇あふぎ三本さんほん幸さい繪ゑには梅松櫻うめしょうおう
子供こどもの行末ゆきすゑ祈いのる顔かほで氏神うぢがみの祠ほくらへ直なし
置信おきしんを取とり御園ごゑんの立願りつがん櫻丸おうまるが命乞いのちご
中の繪ゑは上うへから見みへぬ三本さんほんの此扇このあふぎ
初手はじめてに櫻おうをさらしてたべへエ、上あら
せ賜たまへと再拜さいはい祈いの念ねん、取とり上あげた扇あふぎひら
けば梅うめの花はな、南無なむ三さん是これは叶かなはぬ告つか
神かみの心こゝろを疑うたがふ御園ごゑんの取直とりなおしせぬもの
なれ共助ともすけけたいが一つばいで取直とりなおす
次の扇あふぎ、今度こんども違ちがふて又また松まつの繪ゑ頼たのみ
も力ちからも落果おちて下向くだすりや折をれた櫻おう、定じやう
業ごふと諦あきらめて腹切刀はらきりなた渡わたす親おやぢ、思おもひ切きつて

おりや泣なかぬ、そなたもなきやんな
ヤ、ヤ、ヤ、い、い、い、アレ聞きいたか女
房共にようぼうども、櫻丸おうまるが命惜いのちをまれて、老人らうじんの心
づかひ御恩ごおんも送おくらず先達さきだち不孝ふかう御赦ごあやさ
れて下くだされい下郎げらうながら恥はをしり、
義ぎの爲ために相果あひるこ三方取はうさつて戴かぶくにぞ
もふコレ今いまが別わかれか泣なれ泣なれぬ夫
の覺悟かくご、白太夫しらたうふう目めをしばだき潔
き伴ばんが切腹きりはら、介錯かいくわくは親おやぢがする、其刀
コレ見みやれ、と懐ふから取とり出だすは願
ひ込こんだる鉦かね撞つ木き、コレ此刀このなで介錯かいくわくす
れば未來みらい永劫えいけつ迷まはぬ功力くわんりき利り劍けん即是すなはち彌
陀號だたごうと撞つ木きを取とり打鳴うちす鉦かねもしこ
ろに南無阿彌陀なむあみだ、南無阿彌陀なむあみだ
く南無阿彌陀なむあみだ、念佛ねんぶつの聲こゑも
諸共もろともに襟えり押おすつるげ九寸五分弓手きゆうすんぶんゆみでの
胸むねへ突つ立たつれば八重やえが泣なく聲打こゑつつ鉦かね

拍子亂れて南無あみだくくくく

右のあばらへ引廻し憚ながら

御介錯ナ、介錯と後ろへまはり憧木

振り上げ南無阿彌陀佛と打や此世の

別れの念佛、九寸五分取直し、喉の

くさりを勿切つてかつげと伏て息絶

たり、八重が覺悟も此場をさらす夫

の血刀取上る積躰のかげより梅王夫

婦はしり寄てこりや何事と九寸五分

もぎ取り捨、親の前に畏りコレく

先程歸れと有りし時表へは出たれど

櫻丸がこぬ不思議と、相亟様の御秘

藏有し櫻の折たも詮議もなされぬ、

彼是不審に存するから裏より忍び立ち

戻り始終の様子は承はつた、是非

に及ばぬあの樹と俱に枯し命の櫻

丸、兄弟の最期餘所に見て親人の鉦

鼓にあわせ、女夫の者も忍びの念佛

あつたら若者殺せしと悔む夫婦も聞

く親も八重も死なれぬ身のくり言是

非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打ち納め

憧木さかはる伏さ笠、白太夫は片時

も早く菅相巫の御後慕ひ嶋へ赴く現

世の旅立ち、櫻丸も魂魄は未來へ旅

立、此亡骸梅王夫婦を頼むぞと、八

重も事までつゞくに頼む詞の置き

土産、冥途のみやげは只念佛、南無

阿彌陀佛くく南無阿彌陀佛く

くなむあみだ笠打ちかぶり西へ行

足十萬億土亡骸送る親送る生ての忠

義死したる義心、一樹は枯れし無常

の櫻、残る二樹は松玉梅王三つ子の

親が住所未世にそれと白太夫、佐太

の社の舊跡も神の恵としられける、

(床本) 寺入の段

一字千金二千金、三千世界の寶ぞと

教へる人に習ふ子の、中に交はる菅

秀才、武部源藏夫婦の者、いたはり

かしづき我子ぞと、人目に見せて片

山家、芹生の里へ所替、子供集めて

讀書の、器用不器用清書を、顔に書

く子と手に書くこ、人形書く子は頭

かく、教へる人は取分けて、世話を

かくぞと見えにけり。中に年かさ五

作が息子詞コレ皆これ見や、お師匠

様の留守の間に、手習するは大きな

損、おりや坊主頭の清書したと、見

せるは十五の涎くり、若君はおこな

しく詞一日に一字まなべば、三百六

十字との教へ、そんな事書かず共、

寺入の段

中
 豊竹島 太夫
 鶴澤友 造
 鶴澤友 平
 豊竹和泉 太夫
 鶴澤 叶

松王首實檢の段

切 豊竹古鞆 太夫
 鶴澤清 六

人形

菅 秀 才
 誕生 戸 浪
 女房 千 代
 女房 小 太 郎
 一子 三 助
 下男 三 助
 武部 源 藏
 春藤 立 蕃
 舍人 松 丸
 御臺 所
 吉田 榮 三 郎
 吉田 文 五 郎
 吉田 文 治 助
 吉田 玉 松
 吉田 榮 三
 吉田 玉 七

本の清書したがよいと、八つになる
 子に叱られて、エーませよくと指
 さして、嘲戯かゝるを残りの子供
 兄弟子に口過す、涎くりめをいがめ
 てやごま、手ん手に壓尺ふり廻す自
 然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳か
 や、主の女房奥より立出で 詞又コリ
 ヤ例のいさかひか、おこましく
 今日に限つて連合の源藏殿、振舞に
 往てなれば戻りもしれぬ。ほんに
 くこなた衆で一時の間も待かれる
 今日取分け寺入もある筈、晝から
 は休ます程に、皆精出して習ふた
 く、ソリヤ又嬉しや休みぢやき、
 筆より先に讀聲高く詞いろはに、此
 中は御人被下、一筆啓上候べくの、
 男の肩に堺重、文庫机を荷かせて、

側發らしき女房の、七ツ計りな子を
 連れて、頼みませうと云ひ入る、
 内にもそれと早悟り、ごちへお入り
 遊ばせと、云ふもしとやか、アイア
 イと、愛に愛持つ女子同士、来た女
 房は猶笑顔詞私事は此村外れに輕
 うくらし居る者で御座ります、
 此腕白者をお世話なされて下さりよ
 かさ、お尋ね申しにおこしましたれ
 ば、おこせ世話してやるミ、結構な
 お詞に甘へ、早速連れてさんじまし
 た、内方にも御子息様、ござります
 げなが、ごのお子で御座りますぞ。
 アイこれが源藏殿の跡取りでござり
 ます。コレハくよいお子様や、外
 にも大勢の子達、いかにお世話ご
 ざりませ。アイ御推量なされてく
 ださりませ、シテ寺入は此お子で御

座りますか、名はなんぞ申します。

アイ小太郎と申しまして、腕白者で

御座ります。イヤイヤ氣高いよい

御子や、折悪う今日は連合源藏も、

振舞に参られました。これはマアお

留守かいな、お待ち遠なら私と呼び

にまゐりませう。いえ、幸ひ私も

参つて来る所があれば、其内にはお

歸りで御座りませう、コレ三助、其

持てきたもの、あなたの傍へあげま

せ。アツト答へて塀重、へぎに乗せ

たる一包、内儀の傍へさし出す詞

ればマア、云はれぬ事を、イヤお

はもじながら、此子が参つたるし

此塀重は子達への土産、取りもめて

下されませと、云はれど知れし蒸物

煮染、我子に世話を焼豆腐、つぶ椎

茸の入たるは、奔走子こそ見えに

けれ、詞これはマア何から何まで取

り揃へて、御念の入つた事、戻られ

たら見せませう。詞イヤモほんの心は

かり宜しうお頼み申し上げます、コ

レ小太郎ちよつと隣村迄いて来る程

に、おさなしうして待つて居や、悪

あむきせまいぞ、御内證様、往て参

じましょ。さ表へ出れば詞かい様、

私も行きたいと總り付くを、ふり放

し詞増めよ、大きな形して跡追ふの

か、御らうじませ、まだ頑是もござ

りませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤ

おばがよい物やりましよ、つい戻つ

てやらんせと、目で知らすれば、ア

イ、ついちよつと一走り、跡追

ふ子にも引さるゝ、振かへり見返り

(床本) 松王首賢檢の段 (切)

M 引連れ急ぎ行く。どりやこちの

子に近付きに、若君の傍に寄せ、

機嫌紛らす折からに、立歸る主の源

藏、常にかはりて色青さめ、内入悪

く子供を見廻し、詞エ、氏より育さ

云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを

見ても山家育、世話甲斐もなき役に

立すさ、思ひありげに見えければ、

心ならず女房立寄り、詞いつにない

顔色も悪し、振舞の酒機嫌かは知ら

ぬが、山家育は知れてある子供、憎

体口は聞えも悪い、殊に今日は約束

の子が寺入して居ります、さかな

い人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢

つてやつて下されと、小太郎連れて

引合せと、差俯伏いて思案の体、い

たいげに手をつかへ、詞お師匠様、

今から頼み上げますと、云ふに思は

すふりあをのき、きつこ見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色やばらき詞扱て、器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扱てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何さよい子よい弟子でござんしよ。よい共、上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來さ云ふて。オ、それもよし、大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまわ出た、小太郎俱に奥へく、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子

ありさうな、氣遣ひな聞かしての間へば源藏詞、ウ氣遣ひな筈、今日村の饗應と偽り、某を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今一人は昔相丞の御恩をきなむら、時平に従ふ松王丸、こいつ病者ながら見分の役と見え、數百人にて追取巻、汝の方には昔相丞の一人昔秀才我が子としてかくまふ由、訴人あつて明白、急ぎ首打つて出すや否や、但し踏込み請取ふや、返答いかにこのつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず首打つて渡さうと請合ふた心は、數多ある寺子の内、いづれなりとも身おはりさ、思ふて歸へる道すから、あれか、これか、指折つても、玉簾の中の誕生さ、菰垂の中で育つたさは似ても似付かず、所詮御運の未なるか、いたはしや淺ましやさ、居所

の歩みで歸りしが、天道のひかへつよきにや詞あの寺入の子を見れば、萬更鳥を鷺さも云はれぬ器量、一旦身おはりで欺き、此境さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案、今暫くが大事の場所と、語れば女房、待んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内の悪者、若君の顔はよう見知つて居るぞへ、サアそこが一かばちか、生顔と死顔は相好の變る物、面ざし似たる小太郎が首、よもや賀さと思ふまじ、よし又それあらはれたらば松王めを眞二つ、殘る奴輩切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供も、胸をすみたが一つの難儀今にも小太郎が母親迎ひに來たらばなんさせん、此義に當惑、さし當つたは此難儀詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同士の口先で、ちよぼくさ
 欺して見よ。イヤ其手でばゆくまい
 大事は小事より顯るゝ、ここによつ
 たら母諸共、エーイヤこりややい、
 若君には替へられぬ、お主の爲を辨
 へよと、云ふに胸すゑ、さうでござ
 んす、氣まはふては仕損せん、鬼に
 なつてご夫婦は突立ち、互に顔を見
 合せて詞でしこ云へば我子も同然
 サア今日に限つて寺入したは、あの
 子が業か、母御の因果か、報ひはこ
 ちも火の車、追付け廻つて來ませう
 ご、妻も歎けば夫も目をすり、せま
 じき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居
 たる。斯る所へ春藤玄蕃、首見る役
 は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門
 口にかき据れば、跡には大勢村の者
 つきしたがふて申上げます 詞皆これ

にゐる者の子供が、手習ひに參つて
 居ります、若取違へ首討れては取返
 しがなりませぬ、どうぞお戻し下さ
 れさ願へば玄蕃、ヤアかしましい蠅
 出めら 詞うぬらが伴の事迄、身共が
 知つた事が、勝手次第に連失うと、
 叱りつくれば松王丸、ヤレお待なさ
 れ暫くご駕より出るも刀を杖 詞憚り
 なから彼等逆も油断はならぬ、病中
 なから拙者めが見分の役務むるも、
 外に普秀才の顔見知りし者なき故、
 今日役目仕終すれば、病身の願、
 御暇下さるべしと、難有き御意の趣
 き、疎かにばいたされず普相丞の
 所縁の者、此村に置くからは、百姓
 共もぐるになつて銘々が伴に仕立て
 助けて歸へる手もある事、コリヤや
 い百姓めら、さばくごぬかさず共

一人宛呼び出せ、面あらためて戻し
 てくりよと、のつ引させぬ釘鏝、
 打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟
 も今更に、胸轟かす計りなり。表は
 それも白髪の親仁、門口より聲高
 に、長松よくご呼出せば、オット
 答へて出てくるは腕白顔に墨べつた
 り、似ても似つかぬ雪さ墨、之れで
 はいご許しやる 詞岩松は居ぬかご
 呼ぶ聲に祖父權、なんぢやごはしこ
 くて出て來る子供のぐわんぜなき、
 顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ば
 ぬ連うせうと、にらみ付けられ、オ
 ーこわや 詞嫁にもくばさぬ此孫を、
 命の花落のがれしと、祖父が抱へて
 走り行く。次は十五の誕くり、ぼん
 よくご親仁が手招き 詞さよおれ
 はモウ爰から抱れていのと、甘へる

顔は馬顔で、聲きりんとすオ、泣くな、抱いてやらうと干鯉を猫なで親がくはへ行く詞私か伴は器量よし、お見違へ下さるなと、斷り云ふて呼び出すは、色白々瓜實顔、こいつ胡亂と引さらへ、見れば首筋眞黒々々、墨かあざかはしられども、こいつでないと突放す、其外山家、奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土を産した計孝、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸涙も胸をすゑ、待つま程なく入来る兩人詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合ふた、菅才秀も首サア請取らう早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず詞かり初ならぬ右大臣の若君かき首、れち首にもいたされず、暫

くは御用捨ご立上るを松王丸詞ヤア其手はくわぬ、暫しの用捨さひまごらせ通仕度しても、裏道へは數百人を付け置き、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相好がかけなるなど、身代の鬮首それもたべぬ、古手な事して後悔すなま云はれて、ぐつこせき上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病はうけた汝も眼玉がでんぐり返り、逆様眼で見やうはしらす、紛れもなき菅才の首追付け見せう。オ、その舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく切れと玄蕃が權柄、ハツと計りに源藏は胸をすゑてぞ入にける。傍に聞き居る女房は、爰ぞ大事之心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の敷を見廻し詞ヤア合點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等

は以上八人、机の敷が一脚多い、其伴はここに居るぞと、見咎められて戸涙ははつと詞イヤこりやけふ初めて寺、イヤ寺参りした子がござんす何馬鹿な。オ、それ／＼是が即ち、菅才の、お机文庫と、生地を隠した塗机、さつこさばいて言ひ抜ける詞なん何にもせよ隙ごらすか油斷の元と玄蕃諸共つ立上る。こなたは手詰の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ音、はつと女房胸を抱き、ふん込む足も、けしこむ内、武部源藏白臺に首桶乗せてしづく／＼出で、目通りにさし置き是非に及ばず菅才の御首、討奉る、云は、大切な御首性根をすゑてサア松王丸、しつかり檢分せよと、忍びの鏢元くつるげて、虚ま云は、切付けん、實ま云は

い助けんと聖唾を呑んでひかえ居る
 ハー、ハー、何んのこれしきに性根
 所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か
 金札か、地獄地極の境、家來衆、源
 藏夫婦を取巻きめされ、かしまつ
 たこ捕手の人数十手ふつこ立かする
 女房戸派も身をかため、夫げもさよ
 り一生懸命、サア實檢せよ檢分と云
 ふ一言も命かけ、うしろは捕手、向
 ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰
 ぞ絶對絶命と、思ふ内早や首桶引寄
 せ、ふた引きあげた首は小太郎、獨
 こ云ふたら一討ちと、早抜きかける
 戸派は祈願、天道様、佛神様あはれ
 み給へと女の念力、眼力光らす松王
 が、ためつ、すがめつ窺ひ見て詞ム
 ウコリヤ菅秀才の首打つたは、まが
 ひなし、相違なしと、云ふに悔り源

藏夫婦、あたりきよるく見あはせ
 り。檢使の玄蕃は自分の詞證據に、
 出かしたくよく打つた詞、褒美には
 かくまふた料ゆるしてくれる、イザ
 松王丸片時も早く時平公へお目にか
 けん、いかさま、隙とつてはお咎め
 もいかい、拙者はこれよりおいさま
 たまはり、病氣保養いたしたし、オ
 役目はすんだ、勝手にせよと、首
 受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆ
 られて立歸る。夫婦は門の戸びつし
 やりしめ、ものを也得云はず、背息
 吐息、五色の息を一時に、ほつと吹
 き出す計りなり、胸なでおろし源藏
 は、天を拜し、地を拜し詞ハア、有
 難や忝けなや、凡人ならぬ我君の、
 御聖徳が顯はれて、松王めの眼か
 すみ、若君と見定めて歸つたは、天

成不思議のなす所、御壽命は萬萬年
 悦へ女房詞イヤもう、もう大抵の事
 ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉
 へ、菅相丞様はいつてござつた
 か、但し首が黄金佛ではなかつたか
 似たと云ふても瓦ご金、實の華の御
 運開きと餘り嬉しうて涙かこぼれる
 ハア、有難や尊やと、悦びいさむ折
 からに、小太郎が母いさせきと、迎
 ひと見て門の戸叩き、詞寺入の子の
 母でござんす、今漸歸りましたと
 云ふ聲聞くより又悔り、一つ通れて
 また一つ、こりやマア何と、どうせ
 うと、妻が願げと夫は胸すふ詞コリ
 ヤ最前云ふたは愛の事若君にはかへ
 られぬ、狼狽者めと戸派を引退け、
 門の戸ぐわり引明れば、女は會釋
 し詞コレはまア、御師匠様で御座
 りますか、わるさをお頼み申します

どこに居やるぞお邪魔であるにさ、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよと、眞顔で云へば、詞オそんなら連れて歸りましまと、すつと通るを後より、只一討と切付くる、女もしれ者ひつげし、逃げても逃さぬ源藏が、又するどに切付くるを、我子の文庫ではつしさうけ止め詞コソ待つた待たんせコリヤごちうやと、勿る及も用捨なく、又切付くる文庫は二つ、中よりげらりさ經帷子、南無阿彌陀佛の六字の旗、あらはれ出しはコハいかにさ、不思議の思ひに劔もなまり、すゝみかれてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら、詞若君菅秀才のお身がはり、お役に立て、下さつたか、またか様子も聞きたいと、云ふに悔り詞シテ、それは得心か。得心なりやこそ此經帷子に六字の旗。ムウシテ

其許は何人の御内證と、尋る内に門口より詞梅は飛び櫻はかる、世の中に、なにさて松はつれなかるらん、女房悦べ、伴はお役に立つたぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと叱りつけ、すつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度悔り、夢か現か夫婦かさ、呆れて言葉もなかりしが、武部源藏威儀を正し詞一禮はます跡の事、これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに、いぶかしさよと尋ねれば、オ、御不審尤も、存知の通り我々兄弟三人は、めい／＼に別れて奉公、情なや此松王は時平公に従ひ親兄弟とも、肉縁切り、御恩請けたる菅相丞様へ敵對、主命さば云ひ乍ら皆これ此身の因果、何こそ主従の縁切らんぞ作病かまへいさまの願ひ、菅秀才の首見たらば、喉やら

んぞ今日の役目、よもや貴殿は討ちせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくんばいかせせん、爰ぞ御恩の報する時と、女房千代と云ひ合せ二人の中の伴をば、先へ廻して此の身替り詞机の敷を改めしも、我子は来たかこ心のめぐ、菅相丞には我性根を見込み給ひ、何さて松のつれなからうぞこの御歌を、松はつれない／＼と、世上の口にかゝる悔しさ、推量あれ源藏殿、伴もなくばいつ迄も、人でなしと云はれんに、持つべきものは子なるぞやと、云ふに女房猶せき上げ、草葉のかけで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ詞もつべきものは子なるさば、あの子が爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追ふたを、叱つた時の其の悲しさ、冥途の旅へ入らざる早虫がしらせたか、隣村へ行くぞ云

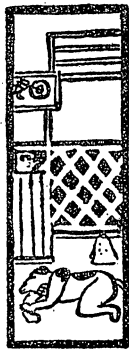
ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるもものぞ、死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香奠四十九日の蒸物まで持つて寺入さすま云ふ、悲しい事が世にあらうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたわ、かあいやその身の不仕合せ、何の因果に痲瘡まで、仕舞ふた事ちやせき上げて、かつげこ伏して泣きければ、俱に悲しむ戸涙は立寄り 詞 最前にナ、連合の身ははりと思ひ付いた傍へいて、お師匠様今から頼み上げますと、云ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理と、涙

添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女房もなんではへる、覺悟した御身がはり、内で存分はへたでないか、御夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最後の節、未練な死を致したでござらう。イヤ若君菅 秀才の御身替りま云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さしのべ。アノ隠げ遁れもいたさすにナ。につこりと笑ふて。ム、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、出かし居りました、利口な奴、利發な奴、けな氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立し、嗚や、草葉のかけよりも、うらやましかる、けなかり、伴が事を思ふに付け、思ひ出さるゝくと、

流石同腹同性を、忘れかれたる悲歎の涙 詞のう其の伯父御に小太郎が、逢ひますわいのと取付て、わつと計に泣き沈む、歎きもれて菅 秀才一間の内より立出で給ひ、我に代るさしるならば、此悲しみばさせまいに、可愛の者やま御袖を、しぼり給へば夫婦ははつと、俱にひたすら難有涙、次手乍らに若君様に御みやげと、松王つゝ立ち 詞申付けた用意の乗物、早くくゝと呼はるにぞ、ハツと答へて家來共、お目通りにかきすゆる。イヤ御出でま戸を開けば、菅相亟の御臺所、ノウ母様か我子かま、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち 詞方々々御行衛尋れしに、いづくにか御座なされし。サレバく北嵯峨の御隠れ家、時平の家

來も聞き出し召捕りにむかふと聞き
それがし山伏の姿となり、危い所奪
ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供な
され、姫君にも御對面、コリヤく
女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつ
し入れ、野邊の送りいさなまん。ア
いと返事の其中に、戸浪が心得抱い
てくる、死骸を網代の乗物へ、乗せ
て夫婦が上着をされば、あはれや内
より覺悟の用意、下に白無垢廊上下
心を察して源藏夫婦、野邊の送りに
親の身で子を送る法はなし、我々夫
婦が代らんぞ、立寄れば松王丸詞イ
ヤくこれは我子にあらず、普秀才
の亡体をお供申す、いづれもは、門
火門火と門火をたのみ頼まる、御

臺若君諸共に、しやくり上たる御涙
冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋
迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、
餐の河原で砂手本、いろは書く子を
あへなくも、ちりぬる命是非もなや
あすの夜誰か添乳せん、らむうぬめ
見る親心、合つて死出の山けこえ合
あさきゆめみし心地して、跡は門火
にみひもせず、京は故郷と立別れ、
鳥邊野さして連歸る。



攝州合邦辻

合邦内の段

合邦内の段

中 豊竹駒太夫
鶴澤重造
切 竹本津太造
鶴澤綱太造

人形

親合邦	合邦	親合邦
玉手御前	玉手御前	玉手御前
奴入平	奴入平	奴入平
俊徳丸	俊徳丸	俊徳丸
淺香姫	淺香姫	淺香姫
吉田榮七	吉田榮七	吉田榮七
吉田玉五郎	吉田玉五郎	吉田玉五郎
吉田文五郎	吉田文五郎	吉田文五郎
桐竹門造	桐竹門造	桐竹門造
吉田市松	吉田市松	吉田市松
吉田扇太郎	吉田扇太郎	吉田扇太郎

この「攝州合邦辻」は安永二年二月北堀江座の正本として菅専助、若竹笛頭が合作したるもので、元祿七年竹本義太夫正本「羽法師」の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前が、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の偽勅使、俊徳丸國遠、給旨取戻しして下の段は天王寺西門闔覽王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書卸し當時合邦内の段の切は豊竹此太夫が語つてゐますが、永らく上場を禁ぜられてゐましたので名作も世に出なかつた。

のですが、その禁も解かれて大正十四年十月の御靈文樂座で初演しました。内容を申し上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身も世もあらわれ無慮の横懸幕をします朝香姫といふ美しい許嫁があるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫が訪れてゆき手を

携へて合邦の家へ行くこ其處で計ら
ずも玉手御前と落ちひます。合邦は
娘の不倫の戀を怒つて我が及にかけ
ますこ玉手は始めて眞實の底意をう
ち明けます。俊徳丸に戀慕と見せた
は計略で悪者等の爲に一命も危い俊
徳丸を助けやう爲であつたのです。
卑しい女から玉の輿に乗せられた
夫への報恩と繼子への義理立とであ
ります。玉手御前は寅の年月揃つた
女で、その臟腑の生血を絞つて飲ま
せるこ俊徳丸の業病も忽ち治るとい
ふ人口に噂突された物語であります

(床本) 合邦内の段 (中)

願以此功德鉦の音山が回向の申上り
萬遍の同行中座並上下の差別なく心
安居の岸はづれ合邦夫婦が志達夜

の料理をこゝくに氣輕手輕の給仕こ
そ心一ぱい馳走なり講中一番はしや
き口せんべ屋の榎右衛門杉箸片手に
しやにかまへチ、奇特によふ勤めさ
つしやるの見れば新しい戒名も張て
有と炬燵のやぐらやあぶりこの様な
角な字ばかりで一つも讀れど此様に
味い事拵らへて講中を呼しやるから
はごふで身内の佛でござらふ誰じや
知らぬが願生菩提念佛に汁菜かみ
ませて蓮池のはぜやの婆イヤコレ合
邦殿志の佛が有と聞た故今夜の念
佛は我一と精出したでいつもこは夜
食も格別麥飯にさろゝじる飛龍頭の
平こんにやくの白あいではいかな亡
者もするこ極樂へすべり込しや
りく佛にならしやるま言も馳走の
道従口主合邦取つくるひイヤモ今夜

の百萬遍はちつと遍ぬ亡者への手向
國を隔てくらす故命日も知らずそれ
で戒命も手作りで大入妙若大姉さ付
て置た御存じもない佛に御苦勞をか
けます即ち是が逆縁の成佛心ばか
りのほんの茶漬何もなくさ御酒も三
献ふふまいつて下されさ夫が挨拶女
房は目には涙のふくみ聲久しう顔も
見す死目にさへも得逢ぬむこい別せ
めて未來を佛にこ御苦勞かけての百
萬遍よふこそ參つて下さりましたサ
アくなるもならぬもかく三でさ後
の盃めんくりにチャット有くこぼる
こ夫婦がしいぶん大分にコリヤた
へ過た満腹さ膳は取れてもうつむい
て辭宜さへならぬ腹盤梅いかい御雜
作御馳走と禮もそこく同行共皆打
連れて立歸る後に女房は御明しの灯

(床本) 合邦内の段 (切)

Mしんくたる夜の道、戀の道に
は暗かられ共、氣は鳥羽玉の玉手御
前、俊徳丸の御行方、尋れかれつゝ
人目をも、忍び兼ねたる煩冠り、包
みかくせし親里も、今は心の頼みに
て、馴れし古郷の門の口、立寄る後
より入平が、御兩所の御行衛、爰に
は聞けと奥方の、姿見るより様子も
と、戸脇にあつき藪疊、身を潜めて
ぞ窺ひ居る、かくとばしらで玉手御
前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ
様、かゝ様と、呼ぶは慥に娘の聲、
ヤア、わりやまだ死なぬか、殺さり
やせぬか、立上りし心付き、振
り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞
えぬは、ヤこれ幸ひと素知らぬ顔、

かゝ様、かゝ様爰明けて、叩く戸
の音聞き告め、コレ合邦殿、今こな
様何ぞぞ云ふてか、イヤ何共云やせ
ぬ、そりや空耳であるぞいの。イヤ
ヤ、空耳かは知られ共、ちらり聞
えた娘の聲、ハテ合點の行かぬぞ立
上る、さう仰有るはかゝ様か、ち
やつと明けてくださんせ、辻でござ
んす戻りましたと、聞いて悔り、ヤ
ア、戻つたとは夢ではないか、
まめであつたか嬉しやと、かけ出る
裾を取つて引さめ、ヤイヤイヤ、狼
狽者、肌はふれてもふれいでも、
我子に不義をしかけた善生、侍の
身で高安殿が、助けおかしやる様な
ければ、何の今迄存命で、うか／＼
爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すよ
り顯はるゝはなし、親はないと云は

してもある事知つて、娘が手から度
々の合力金、二人の命を養ふたは、
皆高安殿の御厚恩。其夫の目をかす
め、善生の心さげた娘、醫へ無事で
戻つたさて、門ばたも踏まされうか
元來娘は斬られて死んだ。が今もの
言ふたが娘なれや、夫こそ幽霊、そ
なた氣味が悪うはないか、肉縁の深
い程、死人になれば恐いもの、必ら
ず門の戸明けまいぞと、云ふに女房
はイヤイヤ、幽霊は愚か、狐狸
の化けたのでもま一度見たい娘が顔
もしや恐ろしいものであつて、目を
廻して死んだら仕合せ、いとし可愛
い子を先立て、生きて業をさらそう
より、一ト目見たいと振切るを、猶
引さめて、ハテ扱て悪い合點じやわ
いの、狐狸か幽霊なればまだしも

もし誠の娘なら高安殿へ義理の言辭
 以前は刀を差した役、親の手につ
 殺さしにやらぬ、それがいやさに留
 めるのぢやと泣かれど親の慈悲心を
 聞く子や妻は内さ外、顔と顔とは隔
 たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠
 を哀れなる、娘は涙押し拭ひ、門の
 戸口に口を寄せ、こゝ様の腹立、お
 憎しみを御尤これには段々言譯あれ
 ど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明
 けて下さんせよ、泣く／＼願へば母
 親は、アレ聞いてか合邦殿、言譯が
 あるさいのマア聞いてやつて下さん
 せ、ハテ娘さ思へば義理もかける、
 幽霊を内へ入れるに、誰に遠慮もあ
 るまいぞへア、いかさまのう、此世
 をばなれた者なれば、世間を憚る事
 もないそんなら早う呼込んでソレ茶

漬でも手向てやりやく、可愛や立
 寄る所はなし、幽霊も嘘ぞひだるか
 るぞ、身を背けるは泣く百倍、母は
 悦び門口の、戸しやおそしと聞く間
 も、おなつかしやなつかしや。と縮
 る娘の顔形、前後見つ肌に入
 ても矢張りほんの娘、嬉しやまめで
 るたかいの。然さは知らいで逆様事
 あたいまく／＼しい百萬遍、弔ひした
 夜に無事な顔、ひよつと夢ではある
 まいかよ、抱きしめ／＼嬉し泣き父
 もほごぶる娘の顔、見たさに思はず
 立寄れど、以前の詞と世の義理を、
 思へばちやつと飛退いて、手持悪い
 ぞいちらしき、母は漸う心を鎮め、
 世間の噂にはの、そなたは、アノ
 俊徳様とやらに戀をして、館を抜け
 て出やつたの、イヤ不義ぢやのと悪

ふ云へど、そなたに限り、よもやく
 さう云ふ事はあるまいの、嘘である
 ぐ。嘘か／＼と箆持つてくゝめる
 様な母の慈悲。
 面はゆげなる玉手御前、母さんのお
 詞なれどいかなる過去の因縁やら、
 俊徳様の御事はれた間も忘れず戀こ
 がれ思ひあまつて打付にいふても親
 子の道を立て、つれない返事かたい
 程猶いやまさる戀の滞いつそ沈まば
 ど、迄もと後をしたふて歩はだし、
 あしの浦々難波がた身をつくしたる
 心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の
 行衛を尋ねれ女夫にして下さんすが親
 のおじひと手を合せ拜みまれば母
 親も今更あきれ我子の顔たゞ打守る
 ばかりなり。父はこかふの詞なく納
 所の内より昔の一腰引提出、ヤイ畜

生めおのれにはまだ咄されど、もこ
おれが親は青砥左衛門藤綱さいふて
ナ鎌倉の最明寺時頼公の見出しにあ
ふて天下の政道を預り武士の鑑と言
はれた人、おれが代になつても親の
かけ大名の数にも入たれど、今の相
模入道殿の世に成て倭人共に譏言し
られ浪人して廿餘年世を見限つての
捨坊主此形になつてもナ親の譲りの
簾直を立通した合邦が子に、よふも
くおのれがやうな娘を持たし思へば
もむちやくちやな娘を持たし思へば
無念で身節が碎けるわい、又高安殿
が今日迄うぬを助けて置つしやる御
心底を推量するに、もこおのれは先
奥方の腰元、後の奥方に引上ふも有
た時、達て辭退しおつたを心の正直
懇望で無理やりに奥方になり、ア、

手をかけず奥様も言さずば此時宜
にも及ぶまい、殺さしやならぬやう
になつたも皆我業さお身の上を返り
見て親への義理に助けて置しやるを
エ有がたい恥かしいさ、思ふ心もけ
しほごでも有なら誓へど程惚てお
つても思ひ切に切れぬさいふ事はな
いわい、それになんじや其さまにな
つてもまだ俊徳様さ女夫になりたい
親の慈悲に尋てくれさばド、ごのほ
うけたでぬかした、エあつちから義
理立て助けて置つしやる程生けて置て
はこつちも義理が立ぬ覺悟せいぶち
放すさ早抜きかくる刀の鯉口、母は
取り付コレ合邦殿コリヤ了簡が違ふ
たくおびひで助けて下さる娘、お
志ししを無足にして殺して義理が立
ますかハテ此上は随分と意見して俊

徳様の事思ひ切し命のかほりに尼法
師いかなる科の囚人も助るば衣の徳
浮世を捨れば死だも同然ごこへの義
理も立道理と奥へ指さし様々さ宥め
すかして母親は我子の膝に膝すり寄
せ聞やる通りの様子なればごの様に
思やつてもそなたの戀は叶はぬ程に
ふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼
になつてたも、つや二十の年ばい
も器量發明勝れた娘、尼になれど勸
めるはごんな心で有ぞいの、助たい
ばつかりに花の盛りを捨てさせてかゝ
れ逆しも黒髪のお筋千筋と撫しもの
剃ればならぬ此時儀は何の因果さ計
りにて絶り付て泣居たる娘は飛退き
顔色がへエ、譯もない事いばしやん
すなわしや尼になる事いばじやく
折角艶よふ梳んだ此髪がごふむごた

らしう刺れるもの、今迄の屋敷風はもう取置て是からは色町風随分はでに身を持って俊徳様に逢たらばあつちからも惚でもらふ氣、けむにも假にも尼の坊主のま言ひ出しても下さんすなご、けんもほろくに寄付す、そふぬかしやモウ勘忍がご父が身構へ母親はチ、道理でござんすく腹の立は尤ぢやがモウ半時かして一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見ませう、夫婦に成て長の年月たつた一度のわしが願ひ聞届けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行て、親母はいぢばる娘の手引立くむりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず淡香姫、一間の内より俊徳の御手を引て忍び出

今の様子を聞に付モウ暫くも此内にお前はごふも置まされぬ、何國へなりさお供せうと、手を引立れば俊徳丸、我業満す母上に斯迄思はれ参らするも身の罪障とは言ながら館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上に、かゝるけやけき姿をばお目にかけてなば母上の愛着心は切もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上に入平夫婦も尋れ來ば召連て立退んご宣ふ聲を聞取門口ア、いや私めは先刻より始終の様子承はる、此所に御座有事里人の噂に聞ばもし敵方へもれば大事、一刻も早く御供せんご、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフなつかしや俊徳様お前に逢ふ計りにいくせの苦勞、物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見たわいな

ごすがり賜へば身をすりのけ、へエい情ない母上様館にても申すごごく同氏さへも要ねは君子の禁め、まして親子のなかへ戀の色のごか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深き俊徳にまだく罪を重ねよごか、見るめいふせき此癩病兩眼しいて淺ましき姿はお目にかゝらぬかや是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へご涙ご俱に恨むれごホ、一オ、愚な事をおつしやります、其お姿も私が業むさいごもうるさいごも何の思はふ思やせぬ自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほどいや増戀の種となり、一倍いごうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業ごおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住吉で神酒ご偽りコレ鮑で勧め

た酒は秘法の毒酒、癩病發する奇薬の力、中に隔をしかけの銚子、私が呑だは常の酒、お前のお顔を見にくうして淺香姫にあいそつかさせ我身の戀を叶へふ爲、前世の惡業消滅之家出有しはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中も君が筐こ此盃肌身放さず抱しめていつか鮑の片思ひ、つれないわいなさ御膝に身を投伏てくごき泣、様子を聞て俊徳丸無念と思せご義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運と御落涙、姫はいつそ涙も出す腹立紛れ取て突退けエ、聞ば聞く程餘りじやわいな

しやご恨み餘つてはしたなき玉手はすつくこ立上りヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊徳様いづくへなりと連退て戀の一念通さで置ふか邪魔しやつたら蹴殺すこ、飛かいつて俊徳の御手を取て引立るア、ラ穢らほしと、ふり切るを放れじやらじと追廻し、さへる姫を踏のけ蹴退けいかる目元は薄紅梅逆立つ髪は青柳の姿も亂る、嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかれてかけ出る合邦娘の誓引搦みぐつこ指込氷の切先、あつこ玉ざる聲に悔り戸をめり／＼かけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけしかか御涙娘をかへる母親は心からさば言ひながらチ、衛なかる苦しかるご歎けば今更人々も

涙／＼を添にける、合邦は怒りの顔色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナ、何ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門様や俊徳様御夫婦へ心の義理がたまいがな、此様な念の入た大惡人をまだおのりや子じやと思ふか、おりやもふ／＼憎ふてくごふもかうたまらぬはい十年以來蚤一疋殺さぬ手で現在の子を殺すも浮世の義理さば言ひながら、是が坊主の有ふ事かい／＼コリヤヤイコリヤおのれ計りか此親まで佛の教を背かして無間地獄の釜こげによふしをつたなア魔王めと抉る拳を手負は押へチ、道理でござんす道理じや／＼憎い苦しやが是には深い様子のある事物語るうち此刀必ず抜て下さんすなき苦しき息をほつこつき様

誕生したる女の肝の臓の生地を取り
毒酒を盛たる器にて病人に與へる時
は即座に本腹疑ひなしと聞た時の其
嬉しき、それでく此盃身に添持
て御行衛尋ねさがす心の割符さ、様
何さ疑ひは晴ましてござんかへナイ
ヤヤくくそんなら何かそちの生
れ月日が妙薬に合た故一旦は癩病に
してお命助け、又身を捨て本腹さそ
ふさ夫で毒酒を進ぜたな、アイヘエ
、出かしおつた出かしたく娘、コ
リヤやい娘モ、い何にも言はぬ堪
忍してくれく日本は扱置、唐にも
天竺にも今一人さくらべる人もない
貞女を畜生の悪人のさ憎て口いふ計
りか親の手にかけむごい最期もコ、
此おれがぐごんながらぢや、あほう
なからぢや、赦してくれさごぶご居

て悔み涙ぞ道理なる始終を聞て俊徳
丸探り寄て繼母の手を取押戴きく
なさぬ中の義を重んじ御身を捨ての
御慈愛、誠の親共命の親共言にもつ
きぬ御厚恩身を百千に碎くとも何さ
報じつくすべき有難や忝けなやこ頭
を疊に付け賜へば其お心さば露知ら
す勿体ない道知らずささげしんだの
が恐ろしいお赦しなされて下さりま
せさ兩手を合す姫の訛、適女の鑑
さも言るゝお身に悪名受かゝる御最
後いたはしやも姫入平も悲歎の涙、
母は正体涙にくれほんにこの子が生
れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、
世間へ沙汰をせぬ物さ世の教をば大
事ぞさ夫婦親子の其外は犬猫にさへ
隠したに義理にせまれば我さ我身を
責はたる無常の虎ひよんな月日に生

れたは持て生れた不運かさ歎けば道
理さ一座の涙、あふ坂増井の名水に
龍骨車かけし如くなり、手負は顔を
ふり上げてサアくくさ様コレ此鳩
尾を切りさいて肝の臓の生血を取此
鮑で早ふくさ氣をいる娘、エ、憎
いと思ふた張り合ひなりやこそ切も
突もなつたもの今では眞底可愛い娘
をさぶママそれが、むごたらしい、
ヤ若役じや入平殿さやら大儀ながら
たのみます、是は又迷惑千萬、主人
の介抱お世話のお禮ごんな御用も相
勤ふが御主人同然の玉手様ごこへ及
が當られませう、こればつかりは御
免くエ、未練な用捨もふ人頼みに
は及ばぬさ、懐劍逆手に取直せばマ
、い、待てくれ娘さても生ぬそちが
命、臨終正念未來成佛々力頼む百萬

遍此人數でくる珠數の輪の中で往生
 せいこ取々廣げる珠數の輪の中に玉
 手は氣丈の身構へ俊徳丸を膝元へ右
 に懷劍左に盃、外には爺の親粒が
 導師の役と鉦撞木母は涙の目も明か
 す筈は死だと思ひ子が回向の爲の百
 萬遍、今又無事なと悦んだも露さ消
 行く進めの念佛、南無阿彌陀佛く
 くくくくく内には難なく切さ
 く鳩尾自身に血汐うけたる盃、指
 付る手もわなくく俊徳丸は押戴
 き母の賜、天地にも餘るばかりの御
 芳志と只一口に吞干賜へば不思議や
 忽ち兩眼開け面色手足もまたく中
 昔の姿に歸り、咲花の顔見る手負苦

しき片頬に笑ひ顔ヤア御本腹かこ一
 座の悦び早斷末魔の四苦八苦、鉦も
 早めて責念佛なまいだくくくく
 く願以此功德平等に死骸に取付き
 絶り付、悲しみ涙添け涙、庭に波
 打つばかりなり、歎きの中に母親は
 頭の雪をうちばらひ、娘が菩提の尼
 衣俊徳君も涙をこいめ廣大無邊繼
 母の恩せめて少しは報ずる爲出世の
 後は此邊に一字の寺院を建立し母の
 尼公を住侶させん繼母は貞女の鑑ま
 も曇らぬ心は清る江に月を宿せし操
 を直ぐに月江寺と號くべしと仰は今
 も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や
 残るらん、父は常々勸進の自力他力

に此佛体建立して我住家を其儘一つ
 の辻堂に營むも又平等利益東門中心
 極樂へ娘を往生なし賜へさ願ふ心は
 後世の爲、現在の名殘數々は百八焰
 惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬さ筐に
 残る盃の逆様事も善知識佛法最初の
 天王寺西門通り一筋に玉手の水や合
 邦が辻さ古跡をこいめけり。



湊町の段

切野 竹本 土佐 大夫
澤 吉兵衛

人形

親	徳	女	母	娘	親	手代	小半	手代	娘
徳右衛門	次郎	小半	おかれ	お夏	佐治兵衛	太左衛門	の親方	清十郎	お梅
吉田玉次郎	吉田文作	吉田光之助	吉田小兵吉	吉田文五郎	吉田玉松	吉田榮三	吉田玉市	桐竹政龜	桐竹紋十郎

切壽連理の松

湊町の段
住吉濱邊の段

この淨瑠璃は文政三年(百十二年前)稲荷の芝居正月興行の切に上演せられたもので、江戸より御目見得の豊竹時大夫の披露淨瑠璃で非常に人氣を占めた、序から段切まで一人も死なぬさいふ珍らしく芽出度い淨瑠璃であります。

姫路の奉公先で主家の娘お夏に思はれた清十郎は、主家の若旦那でお夏の兄の徳次郎が嶋の内の土佐屋の小半と馴染み身代金のこことから、親佐次兵衛と俱々力を合はせてかばふ。

お夏がわざく清十郎の後を慕ふて来るので、清十郎は末は女夫の約束あるお梅が恩義理に金の調達のため乳守へ身を沈めることになるがお夏の立野への嫁入が破談になった結果家が圓くおさまると徳右衛門が馳け付け、お梅は往かずに濟み、徳次郎小半は夫婦になつて家督を相續し、お夏は清十郎の本妻、お梅は妾分となつて皆々芽出度く堅まるさいふお夏清十郎淨名の譚りです。

(床本) 湊町の段

往昔は繪旨の紙も和泉路や湊の町に幾年か古手商賣佐治兵衛の留主の間も油断せぬ娘お梅が針仕事世帯の足に新物の仕立際よき發明者、外は十

日戎市、石津の社へ参詣の往來さだへもならず者、人の油で身を照すた左衛門は、ほろ酔の足もよろ／＼巻舌に十日戎の賣物はばせ袋にこり鉢錢がます小判に銀箱立鳥帽子、菰蓮振槌束のし笹をかたげて千鳥足、ハ、ハ、ア、面白く／＼ハ、ハ、ハ、言いつ／＼そ／＼門口より内を覗いて御無心ながら煙草の火を一つおかしと煙管片手にコレ姉様正月に針仕事はテモきつい篤實家じや親仁様留主かへ、清十郎殿は何處へ、播磨のお客や、嶋の内のも息災でかな、と追かけくばすくり出しに、のらぬお梅はあきれ顔、何じややついに見た事もない形して馴々しいお客の嶋の内のご、客やなら旅籠町へ行しやんせ、人の内をきよる／＼と合點の行

ぬ目付な小人早ふいんでもらひませふ、いにやふが遅いと清十郎様起すぞへと、病づかされコリヤひどい、顔に似合ぬけにくい姉様イヤモンんな所に長居しよより戎に貰ふたこの福を外へはやらじと思ふツンテンツンツンテンツンツン口三味線の拍子取り、足で草履を蹴ちらし、くすねて、エイ／＼ヤア、ハ、ハ、やつと任せと立歸る、主人の難儀身に受てとやかか案する清十郎心奥の間立出て此頃は氣扱ひでか夜の目も合す漸々今炬燵でとつ／＼と寝入つたと思ふたが何やらちやば／＼やかましようて、あつたら夢をさましてのけた、ア、ア、ひびふ疔癖がつかへたはいの、コレちつと擱んでたもらぬか、アノわたしこそ、縫物で肩むいたい、擱んで

ほしくば按摩取りを呼んで来たがよいはいな、ハテ愛のない物の言い様コレ悪い合點じやぞや、そなたの母御お兼女郎は、死なれた母者人ご兄弟分、其縁でちいさいからそなたを貰ふて置かれたは、未／＼おれと娶合す了簡、知りやる通り、姫路のさや／＼もさつぱりさ埒あけて戻つて居ればコレマ女夫じやないかいの、と手を取りちつと引寄せれば、すげなふ、ちやつと振放し、ホ、おかし無理屈いふお方、わしや此内へ子に來ればお前ご兄妹、じだらくな事置しやんせ、あほうらしいと言捨て、ばたくさ納戸へ走り行く、清十郎は肩に皺きつふ工面のちがふた事コリヤもふ此手では行まいわいと、諸手を組でとつ置つ、思案のさころへ小半

が親方、土佐屋の半六、太左衛門に案内させ、つゝと這入つて上り口御免なされませ、其元が清十郎殿かな私に鳴の内の土佐半と申して徳次郎様の相方小半が親方でござります、則ち其小半が先日お客に付て、住吉参りいたしました其晩から行衛が知れず方々く尋ねても知れぬこそ道理、爰の内に埋んであるげな、尤も身の代半金五十兩はこつたれど、後金の将があかねば、手附を流して又外の望のお客へやらればならぬサア奉公人を出しなせ、美しづくで濟していなふと、和らかに出る上手者、清十郎はそしらぬ顔、イヤコレ半六殿さやら、顔近か付でも三里隔た大坂に居る奉公人こちから呼にも行くまいし、又元よりあの子が爰を

知ふ筈もなければ何でここに埋んで置ふ、當すいに追て見るのか、覺へもない事庵相千萬、アコリヤ、清十郎、櫻の町が近いて、餘り鐵砲放すな、ボン、こぼんつかしても隨な證據は、コレ、是じや、親方が目覺へのある小半が履物、われが居ぬ間に眼張ていがめて置た何さこれでもあらがふか、コリヤやい徳次郎めがけつかる事も知て居るはいわれがちえくつたお夏が兄の事つちや、随分腰おせ、おりや又是が徳次郎めをさいなんで、げんさいを引ずつてぬき奥へ行かんとする足首引搦んで、しめ付ればアイタ、アイタ、いりや何とさる、わしが折れるはい、チ、道頓堀のばつたりも大方儼、姫路へうせても街

の頭取體に首の付てあるは旦那の了簡それに爰まで付廻りアノ親方の腰押で、見事家捜し仕て見るか、チ、仕て見せふと振放し、かけ入る所を引かづき庭へどつさり石白投、腰骨打てしきみ面是は親方立上り金も渡さず奉公人も戻されればお家主へかけ出すを、戻りか、つて立聞の佐次兵衛は袖を扣へマア、く、く、く、お待なされて下さりませ、イヤ申し委細は聞ておりました、一旦は悴か存せぬと申したれど證據が有は是非に及ばぬ、成程お二人共かくまふてござります、よつて其金を立てませふ、が今はない、御不肖ながら日くれまで近所にござつて下さりませ、違いなふ五十兩耳を揃へて持て参るが又それをいなさおつしやつて下さ

りますると、小半様は元より御主人
徳次郎様も互に若氣の無分別、咽ぶ
へぐつしやり、ヒリくくくア
大きな殺生、五十兩、棒にふるよ
りマア、半日の御了簡さいやさいは
さぬ、鏡せりふ、誠に年は年だけな
り、親方も納得しし、聞き届けた待

ませふ、そんなら日くれには違なふ
コレ宿は乳守の住吉屋、一家なれば
あそこに居る、必ず、間違ぬ様合點
かき、詞詰して、立出れば、後に残
るも氣味悪く、ぶつつきながら太左
衛門、打連れ乳守へ急ぎ行く、溜息
ついで清十郎日ぐれまでこの請合は
心當でもござりますか、ハテ當かな
ふて請合か、が金才覺に付ては、そ
なたにも用がある、どこへも行ずと
爰に居や、お梅は納戸に居るである

そろく工面は酒肴、拵へるのが序
の始り、ア、さふから此氣が付かな
んださ、一人呑込み、佐次兵衛はさ
つかは納戸へ入りにけり。

遠山風雪、嵐心掃磨路立出て難波を
よそによしあし、思ひ重れてお夏
は今を、旅始め、堺を早く打過ぎて
湊の町にさしかり、尋ね廻りし戀
人の家居は爰と軒の下内を見やれば
清十郎しよんぼりこした立姿、見る
より思はず走り込、逢たかつたさ緋
りつきさかう詞も泣斗り、清十郎興
覺顔、ハテ思ひもよらず國を出て、
大膽な獨り旅、ごふして爰へさいふ
顔を恨しそふに守り詰、ごふして來
たさは、惘然なそなたがいによつた
後追ふて、其夜に忍び出たれ共首尾

悪ふさらへられ、日の目も拜まぬ座
敷牢、まる一月を泣くらしいつそ死
ふと思へ共今一度逢たさ添たさの念
が届いて漸々さ、國を抜出知らぬ道
東からげのかいしよなきこん形し
て歩はだし、野七里山七里ささ七里
て、もの憂き旅路も誰故ぞ、逢ふば
かりに來たものを、つい可愛やと言
いもせず聞へぬはいのさ身をもだへ
恨涙にくれ居たる、春撫下し俱涙
見る影もない私をそれ程したふて下
さるい、お志は忘れぬご、よふ思
ふて、ごらうじませ、忍び逢たは互
の若氣、お前はお主私は家來殊に恩
ある親方、徳左衛門様のお顔をよこ
し、馳落させ、嫁入を妨げていづく
の浦で連添共天道様の御罰にて、安
穩に身が立ふか、爰をよふ聞分けて

私わたしが事ことを思おもひ切きり國くにへお歸かえり遊あそばし
て、立たつ野のへ嫁よめ入いりなさるゝが、清せい十じゅう郎らう
が爲ため、お身みの爲ため、親おや御ごの爲ためと言いひま
して後あとは詞ことばも泣なれ、お夏なつは顔かほをふり
上あてお主しゅさは何なに事ことぞお前まへは假かりの手て代だ
分ぶん、勿な體たいながら人ひと目めがあれば清せい十じゅう郎らう
どふ仕しや斯ごと仕しやと、心こゝろで拜まがんで言い
て居ゐた、まだ其その様ような心こゝろの隔へだち、さゝ様よう
の腹はら立たを思おもへばさうから死しねばなら
ぬ、そこを振ふ捨すてかふした憂うれ目めも苦く
ならぬさばどふした事ことぞお醫い者しや様ようで
も神かみ様ようでも惚ほた病やまひは治なほりやせぬ、
女め夫とこになるがいやならばお前まへの手てに
かけ殺ころしてと絶たくぞわりなけれ
納な戸とに親おやの咳せき拂はらひ南なん無む三さん寶ほうと囁ささて
無理むりにお夏なつを押おし入いへあたふた隠かくす間ま
もなく、佐さ治じ兵へい衛ゑいは酒さけ看ま携かへて、
納な戸とを出いで、お梅うめくさ呼よび出だして改かめて

言いには及およばれど、われを貰もらふて置おいた
のは、清せい十じゅう郎らうと娶めと合あす積つり、所ところにあ
れも姫ひめ路ぢを不ふ首くび尾び、がそれも譯わけよふ
埒らちが明あ隙ひまが出でた故ゆゑ、親おやの後あと繼つぎ、似に合あ
の年とし頃ころ互あひにもほしい時とき分ぶんなれば今いま
婚い禮れいの盃さかづきして女め夫とこになつて彌や々々孝
行こう、清せい十じゅう郎らうも合あ點てんである、何なにが扱さ
親おやのお差さ圖ず、殊ことに二に三さん日にち以前いぜんから頻しばしば
に夫めと婦とに成なりたふて待まちかかれた祝しゆ言げんの
盃さかづき、コレお梅うめ早はやふ吞のんで差さしてたも
さお梅うめを金かねの心こゝろ當あたり、知しらぬお夏なつは物
越こに聞きてしゆらくら、襖ふすまを細こま目め清せい十
郎らう見み付つけてア、コレやくたいもない爰こゝ
へ出でてたまるものか、是これには譯わけのあ
る事ことじや、出でては悪い、出でまいく
く、コ、コレ清せい十じゅう郎らう爰こゝへ出でてたま
るものか、出でまいくさばそりや誰たれ
にサアそれは、サアアノ奥おくのお二人ふたり

目め出でたい事ことじやと思おもふてか、挨拶あいさつに
出でよふさなさるゝよつて、やくたい
もない爰こゝへ出でてたまるものか、人ひとが
見み付つけては悪い出でまいくさばそりや誰たれ
でござります、サ、サ、そふじや、
挨拶あいさつは晩ばんでもなる事ことじや、晝ひる日にち中なかに
出でるは悪い、必かならずず出でまいくサ、サ、
左ひだり様ようじや、ナ、出でてはきつう勝か手てが
悪い、ナ、出でまいぞくサ、我われが言い
ふ通とおりじや出でまいぞくサ、お梅うめ祝しゆ
言げんの盃さかづきは女めからがお定まり、サア酬くわい
せふさ、燗かん鍋なべの口くちもにべなふいやで
ござんす、清せい十じゅう郎らうさんと祝しゆ言げんするこ
さわたしやいやでござんすヤア何なんさ
いふいやじや、祝しゆ言げんをいやじやさば
どふしていやじや、ナ、何なんさして氣き
に入いりませぬ、アイ男おとこが氣きに入いらぬ
なんぼでも祝しゆ言げんはせぬほどに、それ

が憎くばかゝ様の方へいなして下さ
 さんせ、そりや何の事じやい〜去年
 までも後月までも、清十郎様の年も
 まそつごじや、早ふ戻つて下さつた
 ら女夫になつて一日なりさお前に樂
 がさせたいと孝行な事いふた我が今
 になつて男が氣に入らぬいやじやこ
 は、アノ男が氣に入らぬが、エ、勿
 體ない事ぬかすなやい、じまんじや
 ないがおれが細工にはちよふ出来
 た上代物やつしのひんぬきじやによ
 つて、我が一ト目見たらごんごかし
 こもうぞ〜〜さそふと思ふて爲
 たに清十郎が戻つた日から、いふ事
 もすこごにびこしやか〜おれが目
 にも付てある、こりやごふでも儂ご
 いつぞに道明さしたな、ナ、なんで
 ほへる、サア有様にぬかせ何でいや

じや、どうして孟せいぬのじやと、
 息筋張てせちがふ處へお梅が實の母
 親おかれ用有りげに來る門の口、そ
 れさ見るよりオ、よい所へおかれ女
 郎サア〜爰へ〜マ有ふ事が聞て
 下され、お梅めさ清十郎け祝言さ
 そふさいふに、女夫にはならぬ孟
 もいやぢやと此めらふめが我儘ばか
 り、異見さつしやれ、いがめて下さ
 れ、あたぶの悪いと告口を聞く母親
 も蛙の面水くさ口のひつしよなくチ
 いそふでござんせふ、いやと言に無
 りはない、祈言はまあわしからさ、
 ぬ、娘はこちへ取戻す、連に來まし
 た、アイ連れていきます、ヤアヤア
 く〜〜〜こりや又我儘の親玉が
 出て來たばい、末々は清十郎と娶合
 して下され、念頃の切ぬ爲じやさい

ふてくれた娘、意見もすべき實の親
 が娘、道理じや取戻すの、連れてい
 のさはごふした氣まい、娘に無理の
 ない理屈サ、サア聞かふチ、聞た
 くば息子殿に聞しやれ、コレ十チの
 年から男盛りまで養育に預かつた恩
 あるお主の娘御をそ、なかし、嫁入
 の邪魔する恩知らず、わしが智には
 得せまい、氣の悪い男じやもの、娘
 が嫌ふが何と無理か、だまつて居り
 やゑ、かと思ふて去年の夏からごな
 いに浮名が高いぞ、お夏なつ〜夏
 帷子を何に染よぞ清十郎にさへば
 息子供まで諷ふがこなへの耳へはは
 いらぬが、但し知つても知らぬ顔か
 くさいものにふたして置様な舅殿、
 娘さいふもげがらばしいさすつけ
 りいはれて、逆立親仁恩のしやばる

のさば、人の一寸我一尺五つで貰ふて十八まで育てた親の恩を思はず取戻さふのいなふのさ、人間の皮かぶつた者のいふ事かい、所詮そふいふ心な儂等こちらが方にや一つもならぬ、めんごくさい出てうせい、母親め、サアきりくさ連れていれ、チーいないでわい、なら養子手形もせなんだが、仕合せ、サアおじやお梅、アイく清十郎様もふ歸ります、爺様おさらば、エーしらぬはい、うぬらにもいふ口はないはい、チーこつちもそふじやま、母親は娘の手を引き二タ目さも見返りもせず歸りけり、清十郎は最前より、指うつぶいて居たりしが、私が不所存故、親父様まで悪ふいばせ、さぞ腹立ちませふ、御赦されて下さりませ、ハテ

そこ所かい、日くれまでに入る五十兩實は身の差合せ、十人並にも勝れたお梅、乳守へ賣てさ思ひ付ても義理の子故にそふはならず祝言さしたら夫の爲さ其方に賣す工みもすかたん、すりやお前様も其心、此間から私が急に夫婦になるしかけも、男の爲さ勤めをさせ、五十兩を拵へるむごい心も主の爲、思ふに任せぬ今のしだら、もふくれまでに才覺の仕様も綱も切れ果しと心は空にうつさり途方失ふばかりなり、佐次兵衛は胸をすへ、ハテ扱かふなつたら百年目二人の衆を連れましておれが古郷の熊野路へ一まづ影を隠してくれ後は親が引受けて高が牢へ這入る分サアちやつと落てたもく成程御尤したが親を牢へ入れ子が安閑さ何所

に居られふ、御苦勞ながらお二人はお前が連れまし、爰を駈落、私か後に残つて、ごふなり其埒明ます、サアくれぬ間に用意して早ふ爰を頼む子の顔を眺る、目は涙、こちらを熊野へ追やつて、わりやおノ押入さ此内で戒名になつて埒明るのじやなそれが何と出て行れふ、何ほお主の娘御でも、くさり合たらかはらぬ夫婦、コリヤやいこりや、今更阿りはせぬ程にナ奥の二人と四人連れ何處の山家の奥でなき患災で添てくれ、六十越た沙波はづれ、牢へ入らふが切れふが我子の爲ならいさばぬ、さ子故に迷ふ親の闇、可愛さ餘る覺悟なり、奥よりかけ出る徳次郎小半、二人の苦勞もこちら故死で其苦が助けたいと肌用意の剃刀をぬい

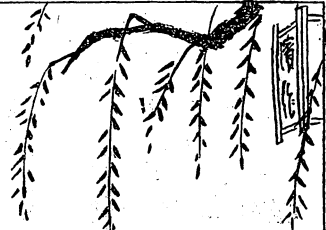
取出し自害の體ヲいあぶないさ清十郎親子
及物持手に取付けばお夏も押入まるび出、
コレ〜〜短氣な兄様死す共ごぞ仕様
さ氣もうろ〜清十郎はせき上げて、へエ
聞へませぬお二人様、親子が色々心を碎
くも、お前方を夫婦にしたさ、其志を無
になさるか、チイソレ〜死なふと言ふ心
なら、清十郎、親父様こちらが先へさもぎ取
る剃及手首に縋つてマア〜〜待てイヤ
〜〜放した〜お放しなされ〜イヤ
〜〜放さぬ〜誤りました、誤つた必
ず死で下さんすなご、お夏も俱に縋り泣、
いつの間にかはお梅の母、痾ふ戸口、ア、
コレ早まるまい命の薬さ、ばつたり投込金
の包、佐次兵衛が膝元へヤアこりや金じや
しかも、五十兩さいふ書付、天から降たか
何處から出た、サア命の薬さやら申たは女
の聲、申し親父様一通が〜り付てござり

ます、ドレ〜ご取上げ見れば、さ〜様兄
様參る、梅より、合點も行かぬぞ封押切り
ナニ〜心せかれ候故、只一通り申上ら
候、小半様の身の代に付きお二人共に心苦
勞を見る悲しく何卒此身を苦界に沈め金才
覺さ存じ候へ共、義理がたいさ〜様誓わた
しが願ふても隔し中の事なれば、よもや賣
ては下さるまいさ昨日か〜様ご談合いたし
わざさお二人にあいそつかされ、其元を歸
るさ其ま、乳守の住吉屋へ身を賣り金調へ
候ま〜、御用に御立て下さるべく候、ヤア
〜〜そんなら、縁切る様に仕かけたも
身を賣ふばかりア、可愛や〜〜な
ア、エ、ちいさいから御養育の恩を思へば
我身の勤めは敷ならず候へ共ついに〜あ
らい詞を聞ぬさ〜様に、假にもお腹を立さ
せまし、お阿りを受し事、今しも悲しく心
も濟ぬ事に御座候、お達者でもお年の上清

即席御料理
電新町九番

濱作

町



十郎様御孝行に頼上候ア、コソ皆聞て下さりませ、なさぬ中の胸愆な此親を孝行にしてくれさば、しほらしいものぢや、ないかいの、よふ言ふてたもつた〜〜モウ〜〜おりに胸おせぐるしなつて、讀たふても目が明れぬ清十郎讀んでくれ、エー清十郎様へ申上候、さら〜お前を嫌ふ心は御座なく長の年月お戻り待ごがれ候へ共、いつぞや大坂道頓堀で預けた笠の頂に隠し有りしをよく〜見れば、そもし様に添れば、生ては居ぬとお夏さまのお文ム、さすれば其文アノお梅様が見やしやんしたかないア〜其後を讀して下さんせ〜わたしが夫婦になるならばお夏様もそもじ様もひよんな事やごなされふか、それででは是まで大恩のこゝ様へ不孝と存じ其時からふつ〜とお前事は思ひ切り只實の兄様と思ひくらし候故わざとすげなふ申せ

しを、必ず〜御呵り下さるまじく候。お夏様さいつ〜までも中よふ添て下されかし、こにかく世の中にあじきなきは、此身ばかりさ諦めおしき筆留り候。いさしやなふと泣出すお夏様の敵さ恨もせず、わたしに添さは餘りな、禮の詞もないはいなごしやくり上れば兄徳次郎、恩も馴染もないこちとが爲に勤を仕て下さる、恩を思へばうか〜と添れふものかのふ小半、サイナアわたしが身受は止にして、ちつ共早お梅様取戻して下さんせ、と義理にせまりし身の覺悟、清十郎は身をかきむしり、こんな心と露しらすだまして賣さ仕たおれが心は鬼か蛇か、赦して下されお梅殿、ご手を合はすれば爺親は無量の思ひにむせ返り思へば〜いぢらしい實の親より大切に孝行にしてくれた子をむごふもくろむ親心、恥かしいやら面目ないやらいつそ此儘死たい

は用御の話電お
南
5番・701番・711番
(最)132番・5291番
西630番



づまは 會宴御
いいのじ感・いる明
〜 理料泉温一南

のまさなみ
理料泉温一南 橋 ツ 四

老の心のやるせなく、身を投伏して、正
 体も涙わかちはなかりけり、小半は涙押拭
 ひ思案極て立上り、半六様の宿も乳守の住
 吉屋此金で大坂の手前は濟お梅様のかはり
 に乳守でわたしお勤する皆さんさらばさか
 け出す、お夏は引留めいへへへへお梅様
 の代りにばわたしが行れば義理が濟ぬお前
 は爰にま行んとするア、お二人ながらそり
 や聞へぬ折角娘が志なせ立さして下され
 ぬと門口よりかけ込母おかれ、右と左にお
 夏と小半引留る手も越涙、血を分た因果に
 は器量勝れた清十郎殿、娘と夫婦にしたけ
 れど、昨日わざとこちへ来て立ながら此
 あらまし身を賣つてくれこの頼みいぢらし
 いやら不便なやら、泣たい所をじつとこら
 へチ、出かした、それでこそ、養子親への
 義理も立つ、母まで人にほめられて、兩方
 の親への孝行と子を賣事をほめそやし、乳

守で談合極めて置き娘をそびき出しに來た
 を、けごられまいと、さつきの悪口田から
 往ても唾から往てもどふで勤をする約束、
 果報のうすい子と思や、そればかりが
 わいひと、覺悟の上も取亂せば道理くそ
 人々は袂をしぼるもらひ泣、和泉の濱の大
 潮に夕立そくごこくなり、思ひがけなき
 徳右衛門、大息ついてかけ來り、ア、コレ
 く清十郎と娘が譯立野へ聞へて縁組變改
 もつけの幸、お夏が行衛、此間から尋にの
 ぼり、元乳守の住吉屋は昔の念頃、立寄た
 ればお梅の噂大坂の土佐屋とやらもそこに
 居る娘の心のしほらしさを皆々感心して泣
 の涙、詰る所はおれが子の徳次郎から起つ
 た事、見捨ては置れずと、土佐屋にも身請
 の後金渡して仕廻、お梅の身の代元銀を住
 吉屋へ遣たれば心よふ了簡してコレ見や二
 人の年季證文連立て來ふと言ふたれど、清

茶



大坂及池橋
 茶屋
 池橋大坂
 新設路町
 番三三二

住吉濱邊の段

竹本南部大夫
竹本小春大夫
竹本源路大夫
豊竹千駒大夫
竹本長子大夫
竹本陸路大夫
竹本幡路大夫
竹本喜久大夫
豊竹駒尾大夫
竹本隅榮大夫
竹本さの大夫
竹本小松大夫
豊竹津磨大夫
野澤吉彌
竹澤園六
鶴澤友之助
鶴澤芳之助
野澤八太
豊澤廣太
鶴澤友若

十郎様の顔を見て、もし未練も出れば悪い、厄になりますさいひさま髪を切る手をおさへ、ア、コレ、コレ、そのやうな事をさして何と見て居られふぞ、清十郎に添そふぞ無理無体に留ごは留て来たが、女房は二人是に當惑、イエイエナア、さう様やつぱりお梅様と添しまして、下さんせ、ア、勿体ない事ばかり娘お梅は妾になりさヤアそんならお夏を本妻にして下さるか、エ、忝い、コレ、コレ、コレ、愛にある五十兩はお梅女郎の拵へ銀こなたに進ぜる持て居やしやれ、小半は徳次郎も嫁にして、後を譲つて我等は隠居またお夏はごふも世間があれば、姫路へは戻られまい、好合た清十郎と左次兵衛殿へ孝行に、大坂で世帯せい、家

も買ふてやる元手もしつかりあてがはふ、何ぼう金があつたて持て死るものぢやなし何所もかしこもよふしてやる、何ぞ皆々嬉しいか、目出たいか、いやもふ嬉しい目出たいに、此上はござりませぬ、親人様段々のお情さ、様エ、お嬉しうござんす、小半様も嬉しがる、アイ嬉しうて、コレ、コレ、コレ、大たい目出度い事じやござんせぬわいな、さ皆々いさみ嬉しさに、おざり上りて、手を合せ、お慈悲、お蔭、お蔭、お蔭、お涙、ア、コレ、コレ、まだおかしき目出度事があるわいの、悪者の太左衛門めが住吉やにかゝんでおつたが、お梅の心底を聞いて發起したか、鬼に衣を割こぼち、旭蓮社へ行おつたはい、ハ、ハ、ハ、いや申し旦那様、まだ

人形

女郎 小半 吉田光之助
 仲居 吉田萬次郎
 供の男 吉田傳之助
 手代 大左衛門 吉田榮三
服才柿
 徳次郎 吉田文作
 手代清十郎 桐竹政龜
 娘お夏 吉田文五郎
 娘お梅 桐竹紋十郎

鶴澤寛太 市
 鶴澤友友 二作
 野澤吉左
 野澤喜代之助
 鶴澤團伊三

くきやうさう日出度事むござりま
 す、此親仁めが考へるに、是程何や
 かやこもめ合た一件に、始りから、
 段切まで一人も死ぬは何さ目出度い
 じやござりませぬか、かい様は目
 出度、マア〜春早々から義縁がよ
 い、一つ打つてくれ、ヤアしやん
 く〜も一つせい、しやん〜、祝ふ
 て三度しやん〜のしやん、しやん
 さおさまる 毒の家は盤石播州姫路
 戀さいふ字を金沙で縫はし裾に清十
 郎さおなつさか、いろのうき名の古
 事をよし、あしこなき難波津にかた
 りつたへてけうじけり。

(床本) 住吉濱邊の段

見渡せば難波の岸の春霞四方の浦々
 よる浪に、ちら〜〜散る花の

たなびく雲さうたがはる、鳥居も花
 にうづもれてこゝ住吉の宮柱、ゆる
 がぬ御代の濱遊山、ふくべの酒に千
 鳥足、扇をかざす、さざんざや、花
 を目當に花を賣る、娘さかりが花
 簪を葉に束れて、宵竹さして赤い
 蹴出しの裾からげ、手おい、手品も
 しほらしく人を集めて立さまり、サ
 ア〜召せよ花かんざしを、いさ様
 やかほ世花、姿ふうわりなでしこの
 末をゆたかに富貴草サアサア〜
 く〜サ〜、召こそ呼びにける。
 色の凄へ戀風吹かばわれも〜さ梅
 さり直し籠櫓早めて沖の舟帆かけて
 こい、かたのお丁坊に目かけねもの
 は猫か鼠か、空飛鳥か扱はん鳥の
 お所化様、帆かけて、来いさ仇口々
 の四人連、汐干にのこる櫻貝まだふ

り袖のいたら貝下女や丁稚がまで貝
さ仇し仇浪、後や先、しどげ形りふ
り、惣々が片思ひかや 蛤の放れぬ
中の友白髪、連は氣さんじ友千鳥、
丁稚の長吉立留りコレ爰に鮎に向ふ
にも己が取たい赤貝じや、ヤレ
貝拾ひでくたびれた、ア、扱々
お梅さんの足よわ、小半さんのべそ
くくお松さんの引白だらく
くさあるかれて、まだ其上に貝ひ
らい、蛤、これの何のかの皆持前
を差置てよはつた丁稚をこぎ遣ひチ
イくくお二人さんもお松さん
も好きな役者の紋の貝がたんさあるぞ
へくエ、おかんせ長吉さんお二人
さんや私の悪口ばつかり、内へ歸つ
たら、徳次郎さんや清十郎さんに告
るぞへ、ノウお梅さんさ、なぞりが

けられ、はづかしの森のあなたのな
りふりも、袖にあまりて、やうく
に、コレお松、そりや何いやる、わ
しや其様な事しらぬわいなア、殿御
に何の口づから語り合さぬあはせ貝
いつ迄待そのかれ言も互にちかいを
帆立貝、あはびの貝か片思ひ、みん
な此身のいたら貝、いたらぬ、ふし
まかこち言小半も傍に氣をいらち思
ひは同じくごき言、徳様まで聞へぬ
お方、乳守の里のきぬくんに放れそ
むない明鳥、可愛さしめて、鯉油も
つい、つきほなく明はなれ、いつも
ほいない愛別れ、思ひやつてまばか
りにて、赤らむ顔のういしくし長吉
は膝打た、きモウそうく兩方から
もたせかけられては、たまらぬく
サアく此浦の景色さんさ書に書た

通り、ヤ此景色を其儘にはんなりこ
踊りにせふ、お二人さんもよごんす
か、お松さんもよいかくサアく
踊りの始まりく、
四社の御まへで扇をひろた、ハンヤ
扇目出度や、末繁昌、サア任吉様の
岸の姫松めでたさや、ハンヤ、四社
の御前に井戸ほりて、鶴さ龜さが舞
遊ぶ、神をいさめて、舞遊ぶ、サア
住吉の岸に寄浪よるさんや、みちく
る汐に驚きて手に手をまりのおから
すや、壽祝ふ連理の松家ある方へ
さ急ぎゆく。

四ツ橋
りよ

昭和七年
一月の文樂座
消息日誌

△一月元旦

第三年一月興行の初日開場。

隔の名人阪東三津五郎丈も中座の稽古の隙を利用して顔を見せてゐました。

春陽會の齋藤清二郎氏の力作になる毎月発行の文樂木版手摺繪葉書の原畫展を特別室で開きました。

△二月二日

吉例によりBKの舞臺中繼放送『花鏡四季壽』を全國へ初放送しました。

△二月六日

阿部第四師團長は臺灣軍司令官に内定し最後の文樂見物をなさいました。

後宮參謀長も舞臺を熱心に見入つて莞爾たる笑を洩らしてゐました。

△二月六日

大久保侯爵久方の西下に大矢寧明氏等の招待で御來觀されました。

△二月七日

大阪善哉學校の諸嬢が的場校長に連れられ百餘名で趣味の一日を過されました。

△二月八日

全國放送部長會議に參集の方々はBK廣江常務の招待で御來場されました。

△二月十日

日本生命保險株式會社新年會を開催二百五十餘名の盛會でありました。

△二月十六日

阪間大阪府内務部長は新任以來初の文樂見物をなさいました。

お歸りに
是非!

独特の座席料
一品の天席
料理は豊富

クルリク

心齋橋北詰西
もり半本店

電話 5000番

夜十一時半迄營業

△一月十九日

古観大夫（清六）の『傾城戀飛脚大和往來（新口村）』を舞臺中繼で全國へ放送しました。

△一月十九日

教護聯盟幹事山本行徳氏の斡旋で芦池小學校の方々が教化資材研究のため一日御清覽なさいました。

△一月十九日

天王寺師範の方々が郷土藝術研究のため六十餘名で観賞會を催されました。住吉小學校の方々もお見へになり非常に皆様御満足でゐられました。

△一月二十日

南海鐵道株式會社自動車課の主催で紀南方面の方々二百餘名の招待會ありました。

△一月二十二日

カナダ・ラクビー・チームの一行はカナダ・ラクビー協會長フアイア・スミス氏に伴なはれ白井松竹社長の招待で一行三十餘名で初めて文樂人形芝居を見物されましたが折柄開幕中の津大夫の『盛綱』の舞臺に非常に感激を持たれ約三分の後二階喫茶室で紋十郎より人形の説明を聞き人形を抱いて記念の撮影をされました。

△一月二十二日

本稀醬油の觀劇招待會が開催されました。

△一月二十四日

多大の人氣を集めた一月興行も次興行準備のため満員裡に打上げました。

化粧タイル

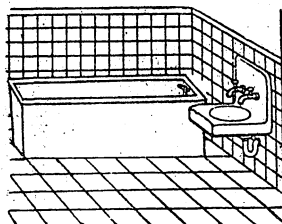
水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水淨化装置

特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

電話新町一六六九
二二七六

阪急 夙川

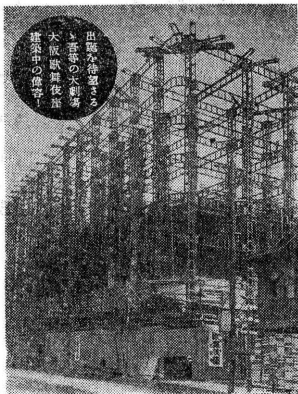
岡部商會支店

電話西宮一九七六

吾等の大劇場・・・

大歌舞伎座 愈々開場！
 今秋

ラッキーセヴン
 昭和第七年！新時代の鮮烈な香氣と要望は
 遂に凝て演劇、映畫、レヅユウの超弩級的
 公開劇場、大阪歌舞伎座の潑刺たるポーズ
 を茲に吾等目睫の間に顯現せんとす！



出陣を告ぐる
 吾等の大劇場
 大阪歌舞伎座
 建築中の盛容！

三二年の新大阪色ナンバー・ワンを直指して、目下、銳意建築中の吾等が大劇場・大阪歌舞伎座は愈よ今秋十月を期して竣工！花々しく開場の豫定です。
 敷地千二百五十八坪、建坪千五十八坪、延坪五千五百坪、最高百二十尺、耐震耐火鐵骨鐵筋コンクリートの八層樓！外觀は薄コバルト清一色の大洋館です。
 觀覽席はもとより、貴賓室、休憩室、映寫室、大食堂、托兒所、冷房暖房換氣其他の新裝置は、宛然内外大劇場のあらゆる美點と、長所の集成と言ふも致て過言ではないでせう。此の設計並に工事はすべて斯界の權威！「大林組」の苦心になるものです。竣工の曉に於て、吾が大大阪新名所の一つに數へられることは、蓋し論を俟たぬまゝころです。

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝 (自正午至午後五時)		夜 (自午後六時至同十一時)		晝 (自正午至午後十時)	
		平日	土曜	日曜祭	平日	土曜	日曜祭
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓	160圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓	170圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓	180圓	180圓

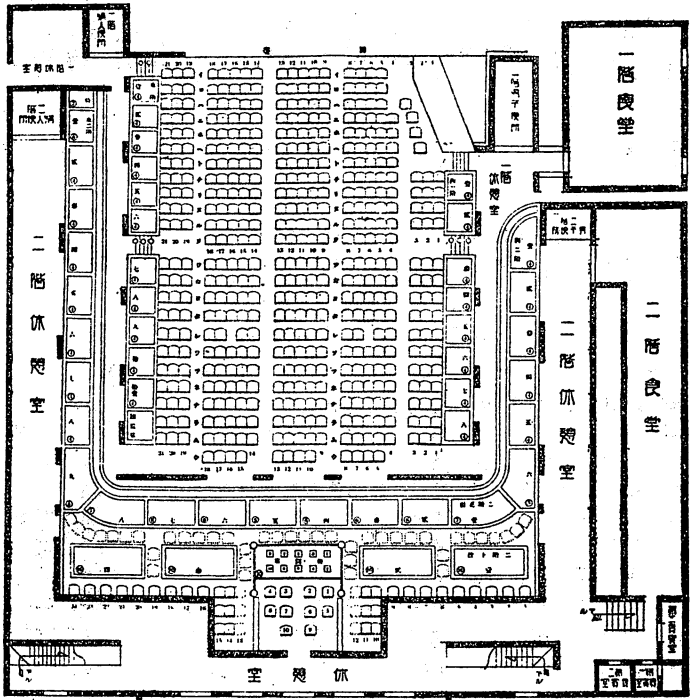
◆ 上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆ 割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アブライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10圓
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風装置使用料		無料
暖風ラゲエータ使用料		無料

内案御席場御座樂文



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。
 前賣切符壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も壹等席に限り御豫約
 申し上げますから上圖の座席
 表に依つてお早く御望みの御
 場席をお申し込みになればお
 心のまゝにお好きな處が御自
 由にされます御用命の節お呼
 出しの電話は
 南四七一一番で御座ります
 切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。
 二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。
 尙多人數様お團體様のお申込
 も御相談いたします。

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守り下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ間ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

御休憩

一階西側の御休憩所へ

お茶と設備が御座ります。
蒸タオルの

各廊下にも喫煙臺が
御座りますから
お煙草は此處で召上
て下さい。
場内の喫煙は御遠慮
下さい。

お土産に

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て
定評ある齋藤清二郎氏の作品

・毎月發行・

三枚一組

美しい包装共

一部

金五十錢

フランス語の

『文樂人形芝居の研究』

宮嶋網男氏著

一部 金壹圓八十錢

木谷蓬吟氏著

『文樂今昔譚』

一部 金二圓

月刊雜誌

『道頓堀』

一部 金三十錢

お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食のバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一審前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。おそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一審前に御受取を願ひます。充分注意致しますが、不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

出演者

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。

御休憩の間

四ツ橋文樂座

前賣切符専用電話南四七二番
電話南 七四〇八番
三七八八番

昭和七年一月廿日印刷
昭和七年一月三十一日発行

大阪・四ツ宮・文徳堂
編輯兼
發行人 大塚 良三

大阪市區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎

大阪市區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

文樂座の御宴會

早春二月の
趣味の御集會
懇親の御觀劇は



大阪唯一の宴會劇場で

觀劇とお料理と
人形を入れた記念寫眞の御撮影の
お楽しみを御利用下さい

金五圓也 御一人様分

御觀覽は.....壹等椅子席
御食事は.....和食・洋食
番附.....役割と床本入
記念寫眞.....人形を入れた特別撮影
(即日お持歸り出来るやう速成)

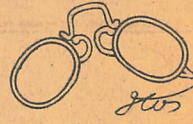
お申込は二十人様以上なるだけ五日前に願います
お電話の御照會申込は

南四七壹壹番へお申付け下さい。

一部 十五錢

美はこの聲
豊かな聲量

は健康から！



眼鏡肝油

Handwritten signature and date: 1933

あなたの美と健康の
爲めに眼鏡肝油を
お奨め致します。

眼鏡肝油製品

眼鏡肝油

二五〇瓦入 瓶入

五〇〇瓦入 瓶入

五〇〇〇瓦入 罐入

メガネ肝油球

百粒 函入

三百粒 函入

全國有名薬店にあり



眼鏡肝油發賣元

伊藤千太郎商會

大阪道修町